



求道

第貳號

第五卷

求道第五卷第貳號目次

求道

◎信仰問題の急所

- 一 信仰と實驗
- 二 入信と相續

感謝

◎我は日野左衛門也◎漏聲の教訓◎水仙◎聖人敵を愛したまふ消息◎聖人弟子を嚴誡したまふ消息◎曉天

講話

◎他力の眞味

近角常觀

教誨

◎教誨自誠

三 監獄は信仰の機縁熟すべき場處なり

聖傳

◎ヂヤータカ釋尊傳

第五 樹の米

告白

◎踴躍歡喜

中村 吾一

◎悲母の引接

羊濃島 與之助

◎眞宗慶歎

九 醍醐眞味

慶 嘆

◎冬三題(短歌)

◎歸路(長詩)

時 報

◎一月中の求道會

左 千 夫
增 田 甚

講

話

求道學舍

(本郷森川町一帯地)

每日 曜午 前九時

第二 求道會

(九段坂佛教俱樂部)

每月 二日 午後七時

第三 求道會

(日本橋堀役町説教所)

求道

第五卷
第貳號

信仰問題の急所

一 信仰と實驗

吾人は求道の文字を掲げて、世の眞摯なる精神的の要求を促し、亦世の煩悶せる人々、此目標の下に切實に求め來りたまへる固に其所也。然れども、世人が求道心に力を用ゐること深きに隨て、自力に陷るの弊多きを認むるや、吾人は遂に注意を促して曰く、信は吾人の求むることによりて得るに非ず、佛陀の吾人を求めたまふ御慈より來れるもの也。即ち求道は吾人の求道に非ずして、佛陀の求道より來れることを認めざるべからず、然れども、之を認めたる時は嘗て自ら求めつゝありし其事が、直ちに是れ佛陀の我を求めたまひし事實たりしことを認むるの時也。

求道の文字既に切實なる要求を促す、況んや實驗の信仰を披瀝し、吾人自身の經路を描くのみならず、告白欄に於て同朋獲信の實驗を説く、世の未信求道の士、益々胸躍り心迫りて

我亦此實驗に達せんと、所謂急走急作して頭燃を拂ふが如き底の態度に出づる亦宜也と謂つべし。蓋し是れ入信前に於ける眞摯なる状態にして、之が爲に遂に偉大なる實驗に達せし人其數頗る多し、然れども、求道者の多くが其實驗を目的とするが爲に、實驗に入り得ざるもの亦少しとせざる也。此に於てや吾人は切言せざるべからず、曰く實驗は實驗せんと欲して得らるべきに非ず、知らず識らずの間に、圖らず佛の御力によりて實驗せしめらるゝもの也。

從來眞宗の安心問題に苦辛するの人は、聞き分け、知り分くることを以て信を得べきが如く思考するもの比々皆然り、亦近時青年の道を求むるもの初めは理論を以て信を求めんとし、理論にあらざるを知るも猶かく、思料すること、を以て信仰なりと誤解す。吾人は此等新舊何れもの誤を去らんが爲に、信仰は佛陀直接の接觸なり、内心の實驗也といふ。しかるに亦其實驗の文字に粘着し來りて我實驗せんと思料し、自ら其心を苦むるに至る、何れの時か佛陀の大慈悲に浴する時あらん、若し所謂實驗の文字を以て吾人の力によりて企圖するものとせば、何の處にか他力信仰の實あらん抑々念佛といひ、他力といひ、易行と云ひ、皆是れ吾人自力難行の成就し難き

が爲に佛陀を念じ奉るに非ずや。既に佛に念じ佛を信じ、佛を稱ふ、吾人の頼とすべきは佛陀のみ、吾人は佛陀の大慈大悲に浴するの外何等の念佛かあらん、何等の信心かあらん、抑々亦何等の實験かあらん。

唯佛陀を仰げ、唯慈悲に浴せよ、信仰は唯文字の如く、仰ぐべし、信ずべし、是即ち實験也。若し亦仰がんと企て、信ぜんと計らは、遂に自力の思量を脱すべからざる也、若し自力の計らひを加へなば、如何なる言語も遂に大悲を説くべからず。抑々他力淨土の眞髓は古來唯此自力律法の計らひを打破りて如來大悲の慈光に接觸し奉るの外なし、淨土一門起りて念佛易行の道起るや、忽ちに觀念の意義を以て自力の計を加ふ、此に於て觀念の念佛を去りて敬虔稱念の念佛を專にす、是善導、法然の念佛にあらずや。然るに法然上人の門弟亦稱名念佛に拘泥して自力修行の計らひを加ふ、親鸞聖人が信樂開發の實験を示し信心歡喜の一念に即得往生の大事成就することを顯示したまふ。後世亦其信心を獲得せんと企て、如來に歸命せんと企て、今亦信仰を實験せんと企つ、是皆知らず證らずの間に自力律法の信心に陥らんとするもの實に戒むべき也。親鸞聖人曰く、夫れ信樂を獲得することは如來選擇の

自然に發動し來れるもの、毫も信仰の目的とすべきものにあらざる也。

しかるに世人一たび入信歡喜の状態に入りて後、其歡喜の漸く減するに及びてや、必ずや信仰の退轉也と思料して修養の力を以て其歡喜の情を回復せんと企つるに至る。蓋し是如來の願船に乗じて猶徒らに船中に自力を勞する人の如し、吾人一たび如來の光明に攝取せらるゝや如何に吾人か其外に逸せんとするも得べからざる也、一たび如來の願船に乗託したるものは如何に歡喜の情の消え去ることあるも毫も本願の力を疑ふべからず、たとひ怒濤狂瀾天を蹴るも本願の船は必ずや吾人を彼岸に運ぶべき也。若し信仰已後に自力修養を以て歡喜を加へんと欲するは船中にありて猶手を勞し、足を歩み重きを負ひ、徒らに氣兼ね心を起すが如し、當に何等の功力もなきのみならず、却て願船のたしかなるを疑ふものなり。

聖人曰く乘大悲願船、浮光明廣海、至德風靜、衆禍波轉と、又讚して曰く、大願海のうちに、煩惱のなみこそなかりけれ、弘誓のふねにのりぬれば、大悲の風にまかせたりと、是皆本願力に乗托するの至安なるを教えたふ、吾人は歡喜の有無に心を止むべからず、唯本願力の偉大なるに信賴すべし。

願心より發起し、眞心を開闢することは大聖於哀の善巧より發起せり、嗚呼如來清淨眞實の親心をさしむけたまふ、人生の悲喜苦樂ことごとくとして大聖於哀の善巧たらざるなし、嗚呼何ぞ左視右顧低徊躊躇するの餘地あらん、吾人は唯々此大悲を仰ぎ此本願を信するの外なき也、是即ち信樂開發の一念、內心實験の眞相也。

二 歡喜と相續

人の初めて如來の光明に接するや實に歡天喜地、踴躍身の措く所を知らざる也、眼に視る所、耳に聴く所、一として身を歡はしめ心を喜はしめざるはなし、此時人生は悉く如來大悲の光明瀾漫して何物か其光澤を蒙らざるものあるべき、且以爲らく此の如きの歡喜は決して滅殺するの期あるべからずと。而して年月を経るに隨ひ歡喜漸く減じて屢煩惱の黒雲を以て蔽はる、此に於てや自ら昔日の歡喜を回想して自ら羨むの愚に陥ることあり、是唯圓坊か聖人に質したるの點にして、聖人却て答へて曰く喜ぶべきことを喜ばぬにて往生は一定と思ひたまふべきなりと、蓮如上人戒めて曰く喜べ助けんとの仰にあらずと、是皆歡喜の深く恃みとすべからざるを戒めたまふなり。蓋し歡喜は佛の大悲大願を仰信したる結果として

至安至樂の境は自から開け來らん。和讃に曰く、五濁惡世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、なかく生死をすてはて、自然の淨土にいたるなれと、本願力を信する外に何物をも加ふべからず、然れども一たび本願に乗じたるものは彼岸に達するまでは少しも變るべからず、亦何ぞ海の平なると怒れるとを問はん。

信後歡喜の少くして修養を以て回復す可らざるに至るや、自ら以爲らく、是未だ信仰の淺きが故なり、冀くは信仰を深めて以て大歡喜の情を起さんと、其歡喜を待設くることは前者に同じくして一たび乗託したる本願の上に猶加へんとするは即ち一なり。然ども、前者は船中にありて氣兼ね心を勞するに反して、後者は船中にありて猶一層の安慰を要求するに似たり、抑々彌陀の願船は吾人罪障の凡夫常流轉のもの、救ひたまふ大悲にあらずや、若し此願船なかりせば吾人凡愚何ぞ寸時も安んずるとを得ん、吾人須らく自ら其罪惡を懺悔して大悲の恩澤を仰ぐべき也、信仰は常に其現在の境遇に安んじて恩徳を感謝するもの、何ぞ一層の安慰を要求せんや、抑々信仰は安慰の爲に非ず、安慰は歡喜と共に信仰の結果也、信仰は寧ろ苦痛にありて却て大悲の善巧を感謝し、困難に遭

遇して一層の勇氣と感激とを持來すもの也。聖人流刑に遇ひて師教の恩致を感謝し、邊鄙の群類を化するを喜びたまふもの、皆本願力の強盛なるによらずんばあらず。身を粉にしても報ずべし。骨を碎きても謝すべしと宣へる所以のもの。實に聖人信後相續の活力也。嗚呼是れ本願力の實現にあらずや。

かくの如く願船に乗ずるものは氣氣もすべからず、安慰も求むべからず、暴風驟雨も悲むべからず、光明の海、大悲の風亦何ぞ氣氣するを要せん。唯稱名念佛して彼岸に向ふべき也。吾人は茲に蓮如上人三首の詠歌を擧げて此篇を結ばんかな。

一たびも佛をたのむ心こそ

まことの法にかなふ道なれ

罪ふかく、如來をたのむ身になれば

法の力に西へこそゆけ

西へゆく道に心の定れば

南無阿彌陀佛と稱へこそすれ

感謝

我は日野左衛門也

寒風蕭颯として窓を撲ち、霜氣人に迫りて肌骨に砒す、燈下筆を呵して想未だ來らず、爐火熾んにして茶臼松濤靜なり、枯坐數時覺えず眠を催す、忽爾醒め來りて聖典を繙く、遙々七百年前を回想して聖人雪中枕石の苦勞を感謝し奉る、自ら顧みれば飽食暖衣爐を擁して坐す、我こそは實に日野左衛門也、驚て戸を排すれば滿天の霜氣森嚴にして五體覺えず戰慄し、寒月氷の如く千古人の心を照す、宛として門前聖人の宿りたまふが如し、嗚呼我等日野左衛門のあらん限りは聖人は千古萬古我等の門前に宿りたまふべし、無垢莊嚴光、一念及一時、普照諸佛會、利益諸群生、我等憊慢貢高の門前には夜々聖人矜哀の血涙絶ゆる時なかるべし、半夜一遍の念佛も皆聖人の御催たらざるはし、若非本師知識勸、彌陀淨土云何人、南無阿彌陀佛

漏聲の教訓

中夜人定まり、天地寂として聲なし、唯漏聲抄を刻するあ

る耳、論註に曰く、百一の生滅を一刹那と名け、六十の刹那を名けて一念と爲すと、嗚呼實に是れ刹那生滅を警告するの響なり、秒一秒吾人の生命を刻みて臨終一念の夕に近かしむ、然れども去る者如何ともすべからず、來者洵に追ふ可し、幸に上盡一形下至一念の念佛あり、寧ろ秒一秒稱名念佛して前念命終後念即生の金言を味はん哉、眞箇にこれ、行住坐臥不問時節久近念々不捨者なるもの、以て漏聲の教訓と爲す。

水仙

机上水仙一莖花笑はんとす、仰て柱上を拜すれば新法臺恩賜の句あり、曰く

水仙の香はしき夜や枕上

句 佛

想ひ起す、是れ三十六年冬御病床に伺候せしとき親書して賜ふ所、鴻恩深重、奉持して日餘香を拜し奉る、

聖人敵を愛したまふ消息

くだらせたまひてのち、なにか、さふらふらん。この源四郎殿に、おもはざるに、あひまいらせてさふらふ、便のうれしさにまふしさふらふ、そののちにごとかさふらふ。念佛のうたへのこと、しつまりてさふらふよし、かた／＼よりうけたまはりさふらへば、うれしふこそさふらへ。いまはよ

く／＼念佛もひろまりさふらはんすらんと、よろこびいりてさふらふ。これにつけても、御身のれうは、いままたまらせたまひたり。念佛を御こゝろにいれて、つねにまふして、念佛をしらんひとく、この世、のちの世までのことを、いのりあはせたまふべくさふらふ。御身とものれうは、御念佛は、いまは、なにかはせさせたまふべき。たいひがふたる世のひとく／＼をいのり、彌陀の御ちかひにいれと、おぼしめしあは、佛の御恩を報じまいらせたまふになりさふらふべし。よく／＼御こゝろにいれて、まふしあはせたまふべくさふらふ。聖人の二十五日の御念佛も、詮するところは、かやうの邪見のものを、たすけんれうにこそ、まふしあはせたまへと、まふすことにてさふらへば、よく／＼念佛をしらんひとを、たすかれとおぼしめして、念佛しあはせたまふべくさふらふ。またなにごとも、たび／＼の便にはまふしさふらひき。源藤四郎殿の便、うれしふて、まふしさふらふ。あなかしこく、入西御坊(日野左衛門)のかたへも、まふしたうさふらへども、おなじことなれば、このやうをつたへたまふべくさふらふ、あなかしこく。

敵を愛したまふ慈愛温情溢るゝばかりなり、しかも、一點自己の力を以てはからはずして、全く如來にまかせ、念佛一つにたよりたまふ、嗚呼偉大なる哉、偉大なる哉、慈悲深遠如虚空、智慧圓滿如巨海。

聖人弟子を嚴誡したまふ消息

御文度々まいらせ候き、御覽せすや候ひけん。何事よりも明法の御房(山伏辨圓)の往生の本意とげておはしまし候こそ、常陸國うちの、これにこそさしおはします人々の御ために、めてたきことにて候へ。(中略)

おほかたは、年比念佛まうしあひたまふ人々のなかにも、ひとへにわがおもふさまなることをのみ、申あはれて候人々もさふらひき。いまもさこそ候らんとおぼえ候。明法房なんどの往生しておはしますも、もとは不思議のひがごとを、おもひなんどしたるこそ、ひるがへしなんどしてこそ候しか。(中略)

年比念佛して、往生をねがふしるしには、もとあしかりしわがこそをも、ひるがへして、とも同朋にもねんごろのこゝろの、おはしましあはこそ、世をいとうしるしにても候はめとこそ、おぼえ候へ、よく御こそを候へし。善知

となりて、おはしましあふて候ぞかし。しかるになをさひもさめやらぬに、かさねて酔をすいめ、毒もさめやらぬに、なを毒をすいめられ候らんこそ、あさましく候へ。煩惱具足の身なればとて、こゝろにまかせて、みにもすまじきことをもゆるし、くちにもいふまじきことをもゆるし、こゝろにもおもふまじきことをゆるして、いかにこゝろのまゝにて、あるべしとまふしあふて候らんこそ、返々不便におぼえ候へ。さひもさめぬさきに、なを酒をすいめ、毒もさめやらぬに、いよく毒をすいめんがごとし。くすりあり、毒をこのめと候らんことは、あるべくもさふらはずとこそ、おぼえ候(中略)

また往生の信心は釋迦彌陀の御すゝめによりて、おこるとみえて候へば、さりととも、まことのこゝろおこらせたまひなんに、いかにむかし御こゝろのまゝにでは候へき。この御中の人々も少々はあしきさまなることのきこえ候めり。師をそしり、善知識をかるしめ、同行をもあなつりなんと、しあはせたまふよし、きこえ候。あさましく候へ、すでに謗法のひととなり、五逆のひととなり、なれむつふべからず。淨土論と申文には、かやうの人は、佛法信するこゝろのなきより、

識ををろかにおもひ、師をそしるものをば、謗法のものとなり、親をそしるものをば、五逆のものと申なり、同座をせざれと候なり。されば北の郡に候し善乗房は、親をのり、善信をやう／＼にそしり候しかば、ちかつき、むつまじくおもひ候はて、ちかづけず候き。明法御房の往生のことをき、ながら、そのあとををろかにせん人々は、この同朋にあらず候へし。無名の酒に酔たる人によ／＼をすいめ、三毒をひさしくこのみくらふ人に、いよく毒をゆるして、このめと申しあふて候らん、不便のこと候。無明の酒に酔たることをかなしみ、三毒をこのみくらふて、いまだ毒もうせはてず無明のさひも、いまださめやらぬ身にて、おはしましあふて候ぞかし、よく御こゝろを候へし(中略)

まづその／＼の昔は彌陀のちかひをもしらす、阿彌陀佛をもまふさすおはしまし候しが、釋迦彌陀の御方便にもようされて、いま彌陀のちかひをさ／＼はじめて、おはします身にて候なり。もとは無明の酒にさひふして、貪欲瞋恚愚痴の三毒をのみ、このみめしあふて候つるに、佛のちかひをさ／＼はしめしより、無明の酔もやう／＼すこしつゝいさめ、三毒をもすこしつゝ、このますして、阿彌陀佛のくすりを、つねにこのみめす身

このこゝろはおこるなりと候なり、また至誠心のなかには、かやうに惡をこのまんひとには、つゝしみて、とあざかれ、ちかづくべからずとこそ、とかれて候へ。善知識同行には、したしみ、ちかづけとこそ、ときをかれて候へ。惡をこのむ人にも、ちかづきなんとすることは、淨土へまいりてのち、衆生利益にかへりてこそ、さやうの罪人にも、したしみちかづくことは候へ、それもわがはからひにはあらず、彌陀のちかひによりて、御たすけにてこそ、おもふさまのふるまひも候はん、當時はこの身とものやうにては、いかゞ候へからんとおぼえ候。よく／＼案ぜさせたまふべくさふらふ(中略)この文をもちて、かしまなめかたの、南の莊、いつかたにも、これにこそさしおはしまさん人には、おなじ御こゝろに、よみきかせたまふべく候穴賢々々

建年四年二月二十四日

一言一句身を斬るが如し、絶對的の斷言他まで吾人の心を廻かへさずんば止まざるの力と涙溢る。反殺丁寧吾人の身に浸むまでは誨へて、諄々倦々する聖人の温顔歴々として拜するが如し、此の如くにして滿九十歳まで誘きたまふ。嗚呼。

曉 天

終夜聖人の御教化を蒙りて更正に闌なり、殘燈影幽にして
爐火既に死灰と化するを覺らず、殘月影淡くして虛窓漸く白
し、寤寐稱名の間に東天曙光輝きぬ、南無阿彌陀佛

必至無上淨信曉。

三有生死之雲晴。

清淨無碍光耀朗。

一如法界眞身顯。

ある人が非常な損失をして遂に執達吏に見舞はるゝ事
となつた、夫は妻に其次弟をうちあけて、大層なけい
た處、妻は夫に、執達吏は、私か子供をつれてゆくか、
又私共の一番大切な夫をつれてゆくかと問ふた、夫は
否と答へた、處が妻のいふには、それでは私共の一番
番大事なものとはとて行かぬ、あなたと私と子供さへ
のこれば、決して悲しむ事はない、又働いて暮す事
が出来ると云つた。此話をよんで大層感した。我々は
物質上のどんな苦勞が出てきても、よく考へてみれば
決して悲しむことはない、一番大事な夫や妻は残つて
居る、たとへ夫や妻や子のうち誰れか死んでしまつた
處で私共は佛様が残つて下さる。こんな心丈夫な事
はない。されば佛様を信ずれば世のどんな苦勞が起
つても實にありがたい。心丈夫である。

他力の眞味

〔求道學會日曜講話〕

近 角 常 觀

今日は新年の始めての講話であります。元より如來の恵に
年末年始の區別は無いのであるが、しかし人の心持の上から
申せば年末年始には何となく特別の感にうたれるものであり
ます。私は今年の正月程心安らかに佛の恵みを喜ばせて頂い
た事は、まだ覺えの無い事でありました。私は舊臘廿二日に東
京を去りまして、郷里で親鸞聖人の報恩講を営ませて貰ひま
した。夫より新年は引き續き郷里で迎えたのであります。考
へて見ると拾五歳の時に國を出てから國で正月を致しました
のは、西洋から歸つた翌年に一度と今度とて二度であります
殊に今年には地方の習俗に従つて、元日には信徒の年賀をうけ
る、其翌日には此方より年賀に廻はると云ふやうな工合で、
今迄は父や父がなくなつてからは母がやつて居られた事を
今年に久しぶりで自分てやらせて頂いた。斯ういふ具合に小
供の時の習慣に従つて正月を迎えた事は、實に二十五年目て
ある。西洋から歸つた翌年にはまた父が生きて居られて、此の
時には何事も皆父がして下されたのであります。

斯の如き工合で今年の正月は色々深く感じさせて頂い

講 話

て、今何から申上げてよいか解らぬ程であります。其の中殊

に私の最も著しく感じた事は、——之は甚だ遠慮の無い言ひ
方であります。私が西洋から歸りまして今日迄丁度足掛七
年になります。此の七年の間私は唯自分の喜ばせて頂いたお
恵みを、何の計らひもなく皆様に聞いて頂き、又私自身も此
の御恵み一つを喜んで其日々を送つて來たに變はりはない
のであります。併し其間に於て私は、今日は心がのんびり
として安らかであつたといふやうの日は、殆んど一日も無か
つたのであります。夫は何故かと申せば、無論一面には自分
で色々計らつて氣をもんで居たに相違はないのであるが、
何うも自分の頂いた恵みを充分に人に聴いて貰ふ事が出來
ぬ、此方で如何程氣をさせても何となく機運が向いて來な
いやうに始終私には思はれてなら無かつたのであります。然
るに現今は——勿論御覽の通り外面上にさしたる變化發達が
あつた譯では無いが、唯何となく私の心に満足に堪えない事
は、佛の廣大なる御恵で、今や到る處に信仰の機運が純熟し
來つたやうに思はれる事でありました。即ち從來親鸞聖人の事
を申しまして世間一般は左程にも耳を傾けて呉れず、又私
自身は現に斯の如き廣大なる御恵の中に生活させて頂いて居
るに係はらず、世の中は何うも此の味を知つて呉れぬ様も
はれて、今迄は安んずるを送り年を迎へる心地も仕なかつたの
である。然るに今年には譯は全く解からぬが、——そうして又
世間的の意味で信者の數がふへたといふ譯ではないが、唯何
となく佛陀のお恵みが十分に世の中へ行き渡つて下さるやう
な感じが致して、私は今年に久しぶりで嬉ばしく新年を迎へ

る事が出來たのであります。

併しながら夫に就きまして七百年の昔に遡りて親鸞聖人
の當時を偲ばせて頂いて見ると、私は彌々慚愧に堪えぬので
ある。我々がどれだけ心が安らかで無いと言はうが、どれ丈
け心配すると申さうが、又どれだけ人が慈悲を喜んで呉れ
ぬと申さうが、聖人が北國御流罪のお身となられて、五年の
間種々の艱難辛苦を重ねて邊鄙の群衆を御化益下された當時
に較ぶれば、我々が飽食暖衣をしてやつて居るとは實に雲泥
の違ひである、私は茲に來ると唯申譯が無いと申すより外は
無いのであります。聖人が越後に出になつた時に

此の里に親の死したる子はなきか

みのりの風になびく人なし

とお詠みなされたと傳へるのであるが、當時の有様は誠にど
のやうであつたであらうかと、恐れながら推察したてまつる
次第であります。

然るに聖人は北越の寒野に在りて、種々と御苦勞を重ねて
下されば下さる程、彌々如來廣大のお恵みをお喜びなされた
のである。度々申しまするが、

彌陀の五劫思惟の願をよく——案ずれば、ひとへに親鸞

人が爲なりけり、さればそこばくの業をもちける身ににあ
りけるを、助けんとおぼしめしたちける本願のかたじけな
さよ〔歎異鈔〕

とお喜びなされたは實に此の北越の風雪の中であつたと承は
る事である。我々はお恵みを喜ばせて頂くと申しても、ほん
のあい間々々の事で、日頃は實に無漸放逸の生活に耽けつ

て居る、たとへ聖人の御化導の跡を偲ばせて頂くと申しても唯心で聖人の御苦勞を想はせて頂くといふ迄で、自分は飽迄淺間しき日暮を續けて居るのである。實に懺悔すべき極であります。しかるに幸にも佛の廣大なる善巧方便に催うされて我れ計はざるに佛の恵みに入らせて貰ひ、いつとなく無明の長夜がほの／＼明け渡つて光明の世の中に出させて頂いたのである。之につけても彌々廣大の御恩が有難く、我身の罪惡深重、何處に一點の取り得なき事を懺悔したてまつるより外はありませぬ。

私は近頃殊に聖人が流罪以後自ら愚禿親鸞と書かしめ給ふた事を一層奥ゆかしく感ずるのであります。私は此迄色々宗教上の經營を試みた事もありますが、之が若し經營のみに心を取られて居つたなら、或は慈悲を喜ぶ事が出来なかつたかも知れぬのである。けれども先づ心にお慈悲を喜ばせて貰ひつゝやつて行けば、自から計はざるに皆都合よく爲て下さる、又如何なる出来事に就いても毎に喜ばねばならぬやうに爲て下さるのであります。凡て人生上の出来事は何によらず一として佛院の御計ひならざるものは無いのである。親鸞聖人は彌々北越へ流罪と定まつた時に、是れ猶ほ師教の恩致なりと、お喜びなされたのである。又御流罪五年の間種々の御苦勞を重ねて下さるにつけ、彌々彌陀の五劫思惟の願はひとへに親鸞一人が爲めてであると喜びなされたのであります。我々の歡びを、聖人のかゝる、限なき御歡びに較べるといふは實に勿體ない事であるが、我々も又佛院の御手引きによつて今も昔と變はりなく喜ばせて頂けるといふは、實に有り難

にしへのゆめ、すてにいと符合せりと。

とあります。救世菩薩の告命をうけし昔の夢といふは、おなじく『御傳鈔』に、

建仁三年四月五日夜寅の時、聖人夢想の告まし／＼き、かの記にいはく、六角堂の救世菩薩、顔容端嚴の聖僧の形を現して……爾時善信、夢中にありながら、御堂の正面にして東方をみれば、峨々たる岳山あり、その高山に數千萬億の有情群集せりとみゆ、その時告命のごとく此文のこゝろを、かの山にあつたれる有情に對して、説きさかしめ畢るとおぼえて、ゆめさめ畢りぬと云々。

とある、是である。聖人が常陸御滞在の時には、いつしか如來のお力が現はれて、聖人を慕ひ寄る道俗貴賤が衢に溢れた。稻田の地形は恰も東方に峨々たる岳山を見て、往年の夢其儘である。聖人が此の時昔の夢を想ひ起して、救世菩薩の告命を蒙つたは此事であつたかと、喜びのあまり悲喜の涙にくれ給ひし様は、今猶ほ想見したてまつることが出来るのである。

私は度々申す事であるが、聖人の御心はもう是て解かつたと、一旦は解かつた積りで居つても、後から後からと更に意外なる深い御意のある事に氣づかせて貰つて、おどろく事ばかりである。聖人の御意は斯うである杯と、私如きが決して限りをつけて言ふ事は出来ぬのである。私は此の飽迄底の知れぬ聖人の御一生を味はせて頂くにつけ、彌々御恩の廣大なるに感泣する外はないのであります。

以上は此の新年以來私の一身上にて喜ばせて頂いた事であ

い事である。

流罪以後愚禿親鸞と書かしめ給ふた事に就きては、聖人が自ら愚禿と仰せられたは、決して世間普通の謙遜の意味では無い、寧ろ心中深く佛院の大悲を喜ばれた嬉しさの余り、自然に仰せ出された言葉である。御流罪五年の間種々に御苦勞を重ねて下さると共に、彌々佛廣大の大悲を身にしてみて感ぜられ、夫れと共に益々自分は愚かなる惡凡夫であると懺悔なされたのである。其の喜びの裏の懺悔の御情が我知らず愚禿の言葉となつて顯はれたのである。よく言ふ御文であるが、『愚禿鈔』の初めには、

賢者の信は、内は賢にして外は愚なり、愚禿の信は内愚にして外は賢也

とある。一面から見れば確かに聖人の絶對的謙虛の美德が顯はれたものに相違は無いが、此の絶對の謙虛は、中心深く大悲を喜ばれた腹一杯の満足より自然に顯はれたものであります。聖人が大悲の親を御覽なされて、如何にも廣大の御哀れみであると、腹一杯に満足なされたと共に、一面自分御自身を顧みて、まことに僧ともつかず俗ともつかぬ淺間しき愚禿親鸞であると、恵みの感しさの余りに懺悔せられた言葉であります。

流罪御赦免の後には常陸へ渡つて稻田の草庵にまし／＼て『教行信證』を御製作あらせられた、『御傳鈔』には

聖人越後國より、常陸の國に越て、……佛法弘通の本懷こゝに成就し、衆生利益の宿念たちまちに満足す、この時聖人おほせられてのたまはく、救世菩薩の告命をうけし

つて、皆さんとは何か懸け離れた事のやうでもありますが、併し信仰の上では私の喜は直ちに皆様の喜びである。私はさう信じますから、自分の感じを遠慮なく皆様に申し上げた次第であります。

偕て斯くの如く頂いて見ると、今更私が佛院のお恵はこうである、ありであると、角を立て、言ふ必要は少しも無いのである。夫て今日は成る可く角を立てずに、他力の眞實の味はひを喜ばせて頂かうと考へて、即ち『他力の眞實の味』といふ題を出したのであります。

他力の眞實の味、他力の眞實の味はひは何うであるかといふに廣大なる大悲の親様の暫くも我々に對して哀はれみの心を離し給はず、過去より今日迄有らゆる出来事は一として佛のお恵みならざるは無い、更に將來を眺むれば、飽迄佛の膝下に導いて下されて、毎に身に餘る大悲の親心を注いで居て下さるのである。此の廣大なる御親心の有り難さを日夜に喜ばせて頂くのが他力の眞實の味はひである。尙ほも一つ言へば、他力の眞實の味はひは日夜に人生の上に溢れ居て下さる。朝起るより夜眠る迄、朝佛前にお禮を上げるより、夜仕事を終へて床に入る迄、佛のお恵は暫くも我が上を離れ給はぬ。此の廣大なる御恵を頂いて、昨日も有り難や南無阿彌陀佛、今日も尊や南無阿彌陀佛と喜ばせて貰ふのが他力の眞實の味であります。

私は御存知の如く此の他力の味はひをお話するに、毎に佛のお恵み、佛の御慈悲といふ言葉を用ゐて居る。處が或人より、其恵みとは何か、慈悲とは何かといふ質問を受けた事がありました。考へて見るに之は如何にも最も事、勿

論佛の大悲を言ふに之れ以上の言葉は無いのではあるが、何うも少し物足らぬ心地がする。其處で更に他力の眞味の要點を正面より明らかに申す時は、佛の願である、佛の本願である、所謂如來清淨の願心であります。

如何清淨の願心、此の語は實に『教行信證』二部を貫く根本である。先づ『行卷』には、

若しは信、若しは行、一として如來清淨願心の廻向成就し給ふところに非ざる事なし

とある。次に『證卷』には

若しは因、若しは果、一として如來清淨願心の廻向成就し給ふところに非ざる事なし

とある。又

若しは往、若しは還、一として如來清淨願心の廻向成就し給ふところに非ざる事なし

とあります。此の清淨願心とは、言ふ迄もなく佛本願の親心である。佛の本願とは何うかといふに、即ち大無量壽經の第十八の本願である。此の彌陀如來の本願の御親心であります。

親鸞聖人は他力を釋して

他力といふは如來の本願力なり

と示し下された。我々は他力といへば、何か別に六しき譯でもあるやうに思ふ事がある。けれども更に珍らしき教えがあるのでは無い、過古以來今日迄日夜に我々を哀れんで下さる如來の本願力、即ち大慈大悲の佛の御親心是れてあります。此の親の御念力の下に安んじて、否安ぜしめられて、人生に

働く事實是れが他力の信、他力の行、他力の相續である。

私はこゝに五年間、随分色々の方面より此のお恵みをお話させて頂きました。或は自分の實驗の上より、或は『教行信證』等の御文の上より、又時には廣大なる大聖釋尊の御經驗の上よりもお話させて頂いた事であつた。處て多くの方が私の話をお聞き下さるにつきて、私が一面に角を立て、懺悔であるとか、信仰をうるのであるとか、實驗が肝要であるとか、心が開けるのであるとか、勿論此等は皆信仰上最も重要な點なのでありますが、併し斯く一面に角を立て、申しますと之をお聞き下れた皆様の方では、唯其一面に眼をつけて、何でもそういう状態に成つて見度い、いや、或は成らねばならぬのであるとか、又は自分もその如き實驗に出遇ひ度ひとかと皆様の方でも角を立て、求めやうとなさる傾きがあつた。併し斯くなる時は、甚だ極端の言方ではあるが又、本願他力の味はひの上より申せば、全く方角違ひとなるのであります。初めに角を立て、申して置いて、今又こんな事を言つては、何だか皆さんを、右へ突いたり左へ押したりするやうであるが、是非こゝは一言をせねばならぬのである。極端ではあるが我々に、信仰に入り度い、實驗を仕度いといふ、此方に求むる心のある時は、既に他力信仰の味はひでは無いのである。之に就きてあまり人の言はぬ言葉ではあります、龍樹菩薩の『易行品』に

是の故に若し諸佛所説のうちに、易行道にして疾く阿惟越致地に至るを得るの方便あらば、願はくば爲めに之を説け、此の問ひを設けて、菩薩が之に答へられた御言葉に、

答て曰はく、汝の所説の如きは、是れ懦弱怯劣、大心有る

こと無し、是れ丈夫志幹の言に非らざるなり。何を以ての故に、若し人發願して、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲して、未だ阿惟越致を得ず、其中間に於ては身命を惜まず晝夜精進して頭燃を救ふが如くなるべし、(中略)大乘を行ぜん者は、佛是の如く説き給へり。發願して佛道を求むる事は、三千大千世界を擧ぐるよりも重しと。汝、阿惟越致地は是の法甚だ難く、久しうして乃ち得べし、若し易行道にして疾く阿惟越地に至るを得る有るをいふは、是れ乃ち怯弱下劣の言にして、是れ大人志幹の説にあらざるなり。

とある。即ち他力易行の道は、怯弱下劣の凡夫の法で、自ら信仰を求め實驗を求めて、求め得るかの如く考へて居る人には、行く事の出来ぬ道である。寧ろそういう人は、頭燃を拂ふが如く努力を試みて、一つ人力の何程であるかを自覺する方が早道である。而も菩薩は言葉を轉じて次に如何に言はれたかといふに、

汝若し此方便を聞かんと欲せば、今當さに之を説くべし。と言つて、

佛法に無量の門有り、世間の道に難有り、易あり、陸道の歩行は則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し、菩薩の道も亦是の如し、或は勤行精進のものあり、或は信方便の易行を以て、疾く阿惟越致地に至る者あり

と仰せられてある、茲であります。成程我々が煩悶して安心を求むる心は、頭燃を拂ふが如き事もある。けれども何程苦しみて求めても、求めれば求むる程彌々苦しむのみである。

こうなつては誰でも自己の力の駄目である事に氣がつかざるを得ぬ。もう斯くなつては、自分で求めるのなんのと言つて居る餘裕はない。信仰がえられぬ、實驗を仕度い杯と言つ居るのは、猶ほ心の底に自力が何とかしたら間に合ふかの如く心得て居るからである。此の何とも仕様のない怯弱下劣の凡愚の我々に向つて殊に其者の爲めに救済の門を開いて下されたが、他力易行の一道である。我々は此の佛の切實なる御親心を頂かねばならぬのである。而も此廣大なる御親心を頂かずして、信仰を得たい、喜び方が足らぬなど言つて居るのは、他力易行の味はひから見れば、まだ餘程遠いのである。

五ヶ年間求道といふ事を標的にして、頻りに道を求めよと言つて居ながら、今更道を求めるので無いと申しては、如何にもひどいやうであります。けれども眞實の求道は佛の求道である。今は他力のこゝろの眞味を話させて頂いて居るのである。皆さんが色々道をお求め下さつた揚げ句、我が力では何うしてゆかね、何か他に易行の方便は無いかと氣づかれた時、皆さんは必ず此の他力本願の御親心に氣がついて、感泣せらるゝに違ひ無い。

其處で他力といふ事は、毫も高尚なものでなく、幽玄なもので無い、唯我々の如き惡凡夫が、信佛の方便を以て教けて頂く道である。決して六かしき教では無いのであります。『易行品』の中には阿彌陀佛の本願を説かれて、諸佛世尊現在十方の清淨世界に、皆な名を稱し、阿彌陀佛の本願を憶念することは、若し人我を念じし名を稱して、おのづから歸すれば、即ち必定に入つて、阿耨多羅三

親三菩提を得ん。

とある。即ち唯佛の御恵みを喜びて念佛する計り、是程手易い事は無いのであります。

念佛といふは何かと言ふに、佛が本願をお起し下された時に、至心に信樂して我國に生れんと欲して乃至十念せんと、お誓ひ下された。此の廣大なる御恵みを頂いて、至心信樂已を忘れて稱へる處の念佛である。善導大師は亦の本願の文を解り易くして

若し我れ佛を得んに、十方の衆生我が名號を稱えて、下、十聲に至らん、若し生れずば正覺を取らじ、彼の佛今現在に在して成佛し給へり、當に知るべし、本誓重願虚しからず、衆生稱念すれば、必ず往生を得べし。

と示下された。茲である。他力の意味は、我々凡夫が自から悟りて佛に成るのでは無い、我々を救うて下さる親様が、現に成佛して我々を待ち居て下さるのである。此の廣大なる親様を喜びて、南無阿彌陀佛々々と、御名を稱へて喜ぶ事、是が他力の念佛である。是れが他力の真味であります。

大層長くなりましたが、今日は何かお話を致さうと思ひます。私は先月の二十二日に東京を去つて、二十三、二十四日は國の親戚の報恩講に參詣致し、二十五日より三晝夜の間に、自分の寺の報恩講を營ませて頂きました。此の報恩講の中には、『御傳鈔』につきて親鸞聖人の御一代を話させて頂き、殊に此の前後を貫きて、本願といふ事を力強く喜ばせて頂きました。然るに私の村に年來非常なる一人の篤信家があつて、此人は随分の老人であります。私の歸へるのを大層待つて居

る計りであると、御誠めなされ事がある。」と話し聞かせました。處が病人は之を大層喜びて、おかげで命拾ひを致しました。」と喜んで居ました。私は病苦も大層つらさうであつたから、又明日来ようと言つて別れたのであつたが、寒風を犯して歸る道すがら、明日ありと思ふ心の仇櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは、の歌を思ひ出して、明日來ると言つたもの、明日迄は何うかとつく／＼人生の無常を感じて歸つたやうな事であつた。處が果して病人は私の去つた二時間程後で、俄に往生を遂げたのであります。後に聞けば、私の去つた後で、いや決して明日といふ日は私には御座らぬ、是れが今生のお暇である。」と、喜び／＼申して居つたさうであります。

今一つは私の歸國中、此學舎に居らるゝ一人の方が、此方は平生私の講話を非常に熱心にお聞き下されて、一度は非常に喜ばれたのであります。何うもまだ充分におちつかぬと言つて、又態々私の跡を追つて、國へ訪ねて来て下されたのであります。私は此方と共に報恩講後より正月へかけて、寢食を共にして、日夜に恵みを話させて頂いた。私は此方に向つて、一體君は何處がさう不足であるか、と、尋ねたが、此方はもう私の話を充分聞かれてあるのだから、筋道は能く解かつて居る、別に之ぞと言つた不審は無いのである。がもう、少し何處か不安心である、何處か明るみが足らぬやうに思はれる、結局は佛陀に歸するのであると思ひます。が、などと言つて居られる。私が言ひますには、夫は寧ろ私の方より言ふべき言葉であるが、併し他力の真味より言ふ時は、君の言葉は全く方角が違つて居る、若し君が不安心であ

つて、報恩講を樂しんで居つたのであつたが、私の歸る少し以前から病氣になつて、報恩講にも參詣する事が出来なくなつた。病人は非常に残念がつて、足腰の立たぬのを無理に起き上がつて私の處へゆくとやつて聞かぬさうである。夫れて私は二十九日に私の方より尋ねて參つた處が、病人は非常に喜んで呉れまして。私は病氣を慰めた後で、親鸞聖人の御教化、之を一口に言へば法然上人が御自身の御影の上に書いて、聖人に遺はされたといふ。之は先程も申した善導大師の御文であるが、所謂、若我成佛、十方衆生、稱我名號、下至十聲、若不生者、不取正覺、彼佛今現在成佛、當知本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生、此の外は無いのである、唯斯の如き如來の本願を承はつて、其仰せ通りに念佛させて頂く、此の外に無いのである。」といふ事を呉々も申しました。此の人は平生よく説教を聽聞して、余り多く聴きわけ過ぎて却て迷ふ事もあるのかと、思はれる程であつたのであります。其時も非常に喜んで、更に言ふには、私はほとけ様を喜んで、念佛をさせて頂く時に、ほとけの御姿は斯うであるとか、あゝであるとか思ふ事がある、之は何ういふもので御座りますかと尋ねられた。其處で私は直ちに、夫れは法然上人の御代にも、或る一人の人が、自分は念佛を稱へる時、如來の御姿を想ひうかべて稱ふると申された、其時御弟子方が之を聞いて、夫れは如何にも尊き御心であると申し合つて居られた處に、上人が之をお聞きあつて、源空は決して佛のお姿を拜めと言はぬ、善導大師のお釋にも、當知本誓重願不虛、衆生稱念、必得往生とあれば、唯如來の本願を信じて自然に念佛を稱へ

ると言はれるならば、此方からは不安心でよいと、言はねばならぬ、光明が見度い言ふならば、此方からは、光明を見るに及ばぬと申さねばならぬ。」とやうに申した事でありました。此方は四五年前此學舎に於て非常に喜ばれたのであります。其後信仰に入つた上は修養に勉めねばならぬと考へられて、頻りに色々各々の努力を試みられたのである。併し何れも勉めて見ても、何うも勉強も十分に出来ぬ、病氣も思ふやうに治ほらぬ、日常の行動も思ふやうに行かぬ。其處で更に考へて、之は未だ御慈悲が充分に通つて居ぬからであると、頻りに光明を求められたのであります。

此方の事を餘りに例に取つて申すやうであるが、諸君の中にも此方とおなじやうの御考の方が、少く無からうかと思ひます。私は思ひますに、我々が彌々他力易行の一道を承はつて、一度は彌陀の願船に乗らせて貰つた上は、其上此の方のやうに、大に勉めねばならぬとか、大に修養せねばならぬとか、といふ心は起らぬ筈である。若し左様の心があるならば、夫は船の上でいらぬ遠慮をするやふなもの、又船が立派に進んでゐるのに、自分て其上にも進ませようと、船の力を危むやうなものである。一旦佛願の船に乗つた已上は、此方て兎や角の心配は要らぬ、此方て心配しなくても、佛の方で既に善きやうに取り計つて居て下さるのである。唯大悲の風にお任せして進めば、夫て善いのである。

大願海のうちに、智慧の波こそなかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風に任せたり。であります。

勿論苦勞性の人であつて見れば、猶ほ色々心配する事があるかも知れぬ。けれども進んで言へば、たとひ苦勞氣兼をしてかまはぬ、唯其苦勞氣兼の下より、斯の如きものを飽迄恵んで下さる御恩を喜ばせて頂くばかりである。然るに此の方のやうに、大に修養を勉めた結局、自分の思ふやうに行へぬからと言つてもう之では駄目だ、改めて信心を頂き直ほさなくてはならぬ、實驗しなほさなくてはならぬとあつては、何うしても之は方角違ひである。既に本願の船に乗せて頂きながら、もつと明らかになりさうなものである、もう少し取りとめが有りさうなものである、斯うもありさうあゝもありさうと思つて居るのは、實は船の力を不足に考へて居る事である。信仰に二た道はなく、又信仰に程度の有るべきで無い。信仰に底の底が有るやうに考へて居るのは、大なる誤りであります。信仰は此方から頂くので難有いのではない、向ふから頂かせて下さるので有り難いのである。唯善きにつけ惡しきにつけ、佛のお恵みを喜ぶ外に、信仰はないのであります。

偕て私は國で或所へ演説に參る事となり、其の方之を聴く爲めに、雪の中を鞋はきつゝいて來られた事が有つた。處が其處の人に強いられて、其の方も餘儀なく信仰を告白せねばならぬやうな、はめになつて、其方の言はるゝに「自分は今迄信仰に底の底が有るやうに思ひ、先生の話しの中にも、何か裏に隠れた處が有るやうに思つて居たのは、非常の誤りであつた。唯もう歎異鈔の「親鸞におきては只念佛して彌陀に助けられ參らすべしと、よき人の仰せを蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり」是れ丈である。私は只今は此の已上に何

も無い事を氣づかせて頂いて、喜ぶのみである」と申されたので私も實に難有く頂いた事でありました。

信仰に於ては、反すゝも、喜ぶのが大切でない、安心する事が主眼で無い、又勿論人格を高め、人品を揚げる事が目的では無い。我身は飽迄も罪惡深重の凡夫で、踴躍歡喜の心の起らぬ程の淺間しき人間である、心は毎に惱み通して、人格の高下は殆んど口にもする事の出來ぬ下劣の者である。けれども此の如き惡人を、見捨て給はぬ大悲の親様が居て下さると聞いては、如何な我々も喜ばずには居られぬ、安心せずには居られぬては無い。此の御親心、此の御哀れみ、此に實に信仰の根本である、我々は此の御恵みを頂いて、泣きながら、惱みながらも、み親の御恩を喜ばせて貰ふのである。之が他力の眞の有り難き味はひであります。

毎々申す通りであるが、私如きも決して常に喜び通して居るといふ譯にはいかぬのである。否寧ろ心の塞がつて、喜びの心の抑えられ居る方が、普通である。之は私として毎に悔懺に堪えぬ處であります。併しながら、いつも斯く氣づかせて頂いては、之を御縁として、佛のお恵みに歸らせて頂く、煩惱起れば、煩惱が御縁で喜ばせて頂く、斯くなれば煩惱も又、御恩を喜ぶ縁として頂く事が出来るのであります。而して煩惱の下より喜ばせて頂く有様を、客觀的に眺めた時には光明の中に住はせて頂くとも、見ゆるのであります。自分て安心しようと思つた時には、斷じて安心は出來ぬ。唯佛のお力に計らはれて、佛の方より安ぜられて生活させて頂くのであります。

偕て色々話して随分長くなりましたが、序だから、何も彼も申しませう。私はこの九日の晩に郷里を立つて一昨十日の朝汽車で、東京に歸つたのであります。昨日早速東京監獄に參りました處が、典獄の言はるゝには、自分は舊臘廿八日に國から電報が來て、娘が死んだといふ報知を得たとの話である、私は之を承はつて更に大に驚いたのであります。御縁といふは實に不思議のもので、此の亡くなられたお娘さんといふは、先きに典獄が此の學舎に連れて出になつた事があつて、私の話を聞き下された事があるのです。猶ほ其後私が會津に參りました時も、兩度とも此のお娘さんは、私の話を聞き下されたのである。他の御兄弟達には未だお目にかゝらぬが、此方丈には斯く再々お目にかゝつた事もあり、私は一入驚いた次第でありました。併しながら承はれば、非常に立派な御往生で有りました。もう間が無いと知れた時、御父御が「覺悟を確かに」と申されたら、靜かに微笑してうなづかれたさうである。夫から周圍の人々に起こして貰つて、手を合はせて父上母上に叮嚀に暇を乞ひ、安心して息を引き取られたさうであります。斯の如き我子のいぢらしき最後を目撃せられた御兩親の胸中は、何んであつたか。定めて深かき感動を受けられた事と察せられます。

夫から私は直ちに監房に參りました。處が、囚人の中に昨年以來非常に信仰を喜ぶ一人の者が出來まして、其監房中の者は、皆彼れに感化せられるといふ有様である。或る新聞記者の如きは、彼の喜ぶ有様を見て、今更宗教の偉大なるを感じ、自分も夫から宗教を尊むやうになつたと言つて、態々

私の許へ手紙をよこされた程であります。其囚人が大層私の歸京を待ち焦れて居つたさうで、私の顔を見るなり非常に喜んで、色々の話しを初める。彼の言ふには「私は毎晩寢られぬから夜九時迄念佛を稱へます。夫から寢ますと、非常に安らかに眠られて、朝も身體がしつかり致します」と、事々につけ喜んで居る。其喜んで居る様を見ると、之が重罪犯人である、今にも命を取られる筈になつて居る人間の姿であるとは、何うしても思へぬ程である。勿論之は彼が自から勉めてやつて居るのは無い、彼の心の中に入れば生命も惜しければ、助かり度くも思つて居るに違は無い。けれど彼の如き重罪惡人をも捨て給はぬ親の大悲に氣づく時は、彼は喜ばずには居られず、安心せずには居られぬのである。是は他力の眞味の最も好適例であります。

其處で度々繰り反すが如く、信仰は、喜ばんが爲め、安心せんが爲め、乃至人格を高めんが爲の信仰では無い。斯の如きは是れ、我々怯弱下劣のもの、口にも出來る事では無いのである。唯此の如き惡凡夫をも、飽迄見捨て給はぬ佛の本願であると聞いて見れば、如何な我々も喜ばずには居られず、安心せずには居られぬのである。此の廣大の大悲心を喜んで居る中に、又いつしか自然の結果として、人格も高まり安心も出来るのであります。人生唯此本願あり、此の親心あり、茲に氣が着いた上は毫も憂ふべき事は無いのである。そうして一旦此の本願の願船に乗托させて頂いた上は、自分て押しつけやうと思つても、押し除ける事の出來ぬ仕合を與へて下さるのであります。

蓮如上人の御詠歌に

ひとたびも佛をたのむ身になれば法の力に西へこそゆけ、
本願の御法は昔より我々を待ち受けて居て下さるのである。
我々が唯一念、この處に氣が就く時は、我れ計はざるにもう
既に本願の御力で、西方淨土に生れつゝあつたのである。

罪深かく如來をたのむ身になればのりの力に西へこそゆけ
我れは實に是れ罪惡生死の惡凡夫、此世は實に是れ無常繫縛
の苦の世界であると、谷のどん底迄落ち込んだ時、茲に如來
の大慈悲が輝いて下さる。あゝ有り難やと罪の中から、如來
を頼む心が起つた時、罪はもとの罪、障りはもとの障りなが
ら、既に本願の大船に乗り込ませて頂いて西の都に急ぎつゝ
あるのである。もう少しも自分て計らう事は要らぬ、唯大悲
の風任せに人生の終りをまつばかりである。

法をさく道にこゝろのさだまれば、南無阿彌陀佛となへ
こそすれ

既に本願の船に乗り込ませて頂いた上は、手足をまかく必要
は無い、唯大悲の恩徳を喜んで、南無阿彌陀佛々々と喜ば
せて貰ふばかりである。此の念佛は修養の念佛では無く、此
の親心の有り難さを喜んで稱へる念佛であります。

先日も或囚人が、私は近頃頻りに親を思つて居りますが、
此の私の心は親に通ふものでありませうかと、聞きました。
私が言ひますには、夫は實に勿體なき言ひ方である、此方て
親を思ふ心位は、たとへば前が何れ程思ふとしても、ほんの
僅のものである。其僅かな善が心を以て親の心に届かせやう
抔とは、實に勿體ない。親はたとへば前が思つて居ない時て

教 誨

教 誨 自 誠

近 角 常 觀

三 監獄は信仰の機縁熟すべき場所なり

孔夫子姜里に囚はれて易を繙き、ソクラテス獄中靈魂不死
を説きて、從容として毒杯を仰ぎて瞑したるを始として、古
今哲人の囹圄の裡に修養體達せること決して鮮くない。され
ど今説かんとするは必しも此の如き高尚なことでない、如何
なる不運不幸によりて獄中に繋るも、亦如何なる惡逆重罪に
よりて監獄に入るやうになつても、同じくこれ人間たる已上
は、必ず佛の御恵みに目覺むる様になる時機があるといふこ
とである。一言にして云へば何人によらず監獄といふ所は、
信仰の機縁の熟すべき場所といふべきである。

抑々釋尊一代五十年の間、或は國王長者の宅に、或は邑里
街頭に、或は山上林中に到る所、化を施したまはざることな
けれど、特に他力本願の眞意を開顯して罪惡救済の仁慈を説
きたまひしは實に王舍城中に悲劇が起りて、頻婆沙維王及韋
提希夫人が七重の牢獄に幽閉せられたまひしときである。こ
は小著懺悔錄を始めとして屢々述ぶる所なれど、年を経て諸
の出來事に出遇ふごとに、常に新らしき感じを以て其味の深

毎度申上ぐる事であるが、法然上人は此の他力の眞の味は
ひを、撰擇本願念佛として、おすゝめ下されたのであります。

處か當時の人々は、之を聞き誤つて、唯念佛の一つに力をい
れて、口稱の念佛におちた人が少くなかつた。其處で親鸞聖
人は、本願を信する一つである、仰せ下されたのである。
處が又信するの二に力をこめて、肝心の本願の御親心を忘れ
るやうの事があつては、残念と思ひます。初めにも申した如
く、聖人は一若しは信、もしは行、一として如來清淨願心の
廻向成就し給ふ處にあらざる事あることなし」と仰せられて
ある。則ち信も行も、皆な廣大の御親心の御賜ものに、外な
らぬのであります。

今年も別に從來と變はつた事もありませぬが、互に手を取
り合つて、皆さんと共に一層お恵みを喜ばして頂き度いと申
ひます。(一月十二日)

有 感

行 誠 上 人

生死無常今古同。因縁如是奈無窮。能令瓦礫變成池。
偏待願船不退風。

行 乞 口 號

今朝鳴錫出叢林。勤發壇波羅密心。隨見隨聞皆佛種。
一錢一粒是千金。

きを覺ゆる次第である。抑々親鸞聖人が觀經の價值を認めたまふも實に此一點である。古來眞宗で觀經は機の眞實を示すと言ひして云ふも、決してこれは法門沙汰ではない、實際人生上に未曾有の逆惡の事實があらはれ來りて、頻婆沙羅王の如き敬虔慈仁の人が、懦弱なる提婆の教唆によりて、不孝の阿闍世の爲めに幽閉せられ、食を斷たれ、遂に餓死せねばならぬといふ境遇、眞愛柔順なる韋提希夫人が頻婆沙羅王に私かに食を運びて、阿闍世の瞋怒に遇ふて亦獄中に幽閉せられ、愁憂憔悴し、煩悶に堪へずして遙に釋尊の慰問を求められるなど、歷々として吾人の眼前に見ゆるが如き有様である。此の如き悲劇、此の如きの逆惡に對して何人をも捨てずして遂に盡く大慈悲の中に攝取して捨てたまはざるが如來本願の素懷である。さればこそ親鸞聖人は教行信證の開卷總序の始め

然れば則ち淨邦緣熟して調達闇世をして逆害を興せしむ、淨業機彰はれて釋迦韋提をして安養を選ばしめたまへり、斯れ乃ち權化の仁、齊しく苦惱の群萌を救濟し、世雄の悲正しく逆誘闇提を惠まんと欲して也、と宣ひ、又略文類にも同じく

是を以て、淨土の緣熟して調達闇世をして逆害を興せしめ、濁世の機を哀んで釋迦韋提をして安養を選ばしめ玉へり、情々彼を思ひ、靜に之を念するに達多闇世弘く仁慈を施し、釋迦彌陀深く素懷をあらはせり、と宣ひ、又化身土卷に

釋家の意に依て、無量壽經觀經を案すれば顯彰隱密の義あ

たる宮殿に於ての說法にあらずして、實に阿闍世王の爲めに幽閉せられたる時である。夫人の言に『如來世尊在昔の時、恒に阿難を遣はして來て我を慰問したまへり、我今愁憂す、世尊は威重にして見奉ることを得るに由なし、願はくは目連と尊者阿難とを遣はして我が爲めに相見せしめたまへ』と、是語を作し已りて悲泣雨淚して遙に佛に向て禮し奉る、とある。而して目連と阿難を帥ゐて王宮に來現したまひし釋尊は、恐多きこと乍ら實に此場合に於ける尊き教誨師である。韋提の憂惱は無理なきことながら、つまり女性の愚痴と人生に對する厭世悲哀の極である、曰く『今世尊に向ひ五禮を地に投げて求哀懺悔す、唯願くば佛日、我をして清淨業處を觀せんことを教えたまへ』此時釋尊は決して世俗的人情を以て其逆境に同情したまふのではない、一言も阿闍世や提婆に對する善惡の言はない、亦其幽囚が有罪に出でたるが、不幸に出でたるかは毫も關する所ではない、頻婆沙羅王は唯世尊微笑の光明を拜したるばかりにして、親しく佛に接したてまつらざるも、幽閉中心眼障りなく佛を見奉りて平安を得た。此時に於ける佛の御教誨は實に簡明である、曰く『爾時世尊韋提希に告げたまはく、汝今知るや否や阿彌陀佛此を去ること遠からず、汝當に念を繋けて、歸に彼國の淨業成したまへる者を觀すべし』と。聖人は化身土卷に此言を釋して『本願成就の盡十方無碍光如來を觀知すべし』と云はれた。即ち盡十方碍光如來の御慈悲は如何なる所も照さざるなく、此幽閉の室内も毫も碍ゆる所なし、實に阿彌陀佛此を去る遠からず汝之を知るや否やと、是れ經觀の骨目である。此言は古昔韋提希

り乃至彰と言ふは如來の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す、達多闇世の惡逆に緣て釋迦微咲の素懷を彰し、韋提別選の正意に因つて、彌陀大悲の本願を開闡す、斯れ乃ち此經の隱彰の義也

これ決して法門、教理の問題ではない、人生、實驗の問題である。聖人は文字で經文を讀みたまはぬ、信仰で事實を讀みたまふのである。而して此事實は千古萬古繰り返されたる事實である。釋尊が出家の動機となりし生老病死の問題が、即ち吾人が眼前に於ける生老病死夫自身たることを知らば、淨土教の機縁の純熟せし事實、頻婆沙羅、韋提希夫人の幽閉、提婆阿闍世の逆惡も畢竟現今吾人の眼前に目撃する社會の悲劇、罪惡、監獄、煩悶夫自身に外ならぬことを自覺せねばならぬ。今監獄は信仰の機縁熟する所なりといふが此點である。人生何れの所か盡十方無碍光の照さる所がある、故に何れの所にも此光明に接し得られぬ所はない。されど、人間的快樂に心を奪はれ、對他的感情を以て愛憎の念に驅られつゝある時は、却て此光明に接するの機會が少ない。寧ろ人生の快樂を奪ひ去られ、對他思想の極點に達して、進むに所なく退くに所なく、亦止るに所なき逆境は唯如來の光明中に入るより外に餘地なき境遇である。監獄が實に此場所である、亦觀經が此境遇の最も極端なる實例である。頻婆沙羅王は釋尊出家の時より結縁し、成道以後最初に歸依したまひ、竹林精舍を捧げられし大檀越である。釋尊屢々其王城に說法したまひし時、勿論達提希夫人が常に聞法せられしことも疑ひなき事實、されど眞實の求道心の起りたるは、王城の華麗を極め

夫人のみに仰せられた言では無い、現時監獄に幽囚されたるものに向て仰せ下さる釋尊の教誨である。

釋尊は提婆阿闍世の逆惡を咎めたまはぬばかりでは無い、下品下生に至りては五逆十惡具諸不善の愚人も臨終苦痛に逼らるゝ時、善知識善友の安慰の下に、十聲稱佛して救はるゝ大悲を説きたまふた。此に至りて遂に韋提希夫人は廓然大悟して無生法忍を得た、實に攝取光明中の人となつたのである、一人獄中信仰に入らば之に伴ふものは必ず同一の信仰に入るものである、多數の待女の發心も即ち是である。頻婆沙羅王の如き獄中途に餓死の悲惨なる最後たりしかど、顔色和悦の有様で、何の怨むる所もなく法喜を以て終られたのである。釋尊唯一の大檀越、摩訶陀國大王の最後か世俗的には此の如き不運の極に見ゆるも、信仰的には此の如き場合に此の如き法悦を以て淨土に生れたまひしだけ、一層美ばしきことである。

頻婆沙羅王は一代が間善を爲し、身は死して信に生きた。韋提希夫人は信に生き、又身も生きて、却て惡逆の阿闍世王の身心の惱亂を介抱したまひた。如何なる阿闍世王も終に煩悶の極點に達して、悶絶して地に覺るゝに至つた。我懺悔錄に告白せし如く、私の如き實に阿闍世の胸中と一點異なることを見出さない。何人も自ら此阿闍世たることを自覺せねばならぬ。聖人信卷に詳しく此文を引きたまひて、恐多くも自ら懺悔慙愧したまひてある。而して是れ實に現時在監者の必ず陥るべき胸中懊惱の活畫である。此阿闍世土の救済がなかつたならば、恐くば監獄の教誨は不可能である、否私自身が

救済する。ことは出来なかつたであらう、否罪惡救済の眞宗は開けなかつたであらう、否遂に人生如來本願の大悲は開けなかつたであらう。然るに阿闍世王は此の如き慈父悲母の導きによりて遂に身心ともに如來の光明に照され、先づ身蘇り、心に旃檀の信を生ずるに至つた。是實に阿闍世自身の救済のみでない、實に一切衆生の惡心を破壊する源である。當時の摩訶陀國の人及び王及び夫人、後宮采女皆信に入つた。歴史上明かに阿闍世王は父王の志を繼ぎて佛教の歸依者保護者として顯著なることである。此佛涅槃前に於ける最後の大慘劇は何ぞ知らん、これ人生の上に如來大慈悲の親心をあらはす爲の出来事である。

信仰の眼には獄中に死せる頻婆娑羅も、不運なる韋提希、惡逆無道の阿闍世も皆同一涅槃醍醐味の如來の大慈悲に攝取さるゝ外はない。私は和讃をよみて此悲劇に對する聖人が左の如き役割と筋書とを拜見して、私に無限の感謝の涙を注ぐものである。

阿闍世 如來

觀世音菩薩
大勢至菩薩

釋迦牟尼 如來

富樓那尊者
大目犍連

頻婆娑羅王

韋提夫人
阿難尊者
耆婆大臣
月光大臣

聖傳

ジャータカ釋尊傳

第五、樹の米

世尊ジエタバナに滞在したまひしとき愚者ウダインとよべる僧につきて説きたまひしことありき。

當時ダツパと云へる長老は大眾の食物の管理をなした。ダツパは毎朝食事の札を各に分ちしが、ウダインは時には優れたる米を得、又時には劣れる米を得たりき。一日劣れる米を受けしとき、彼は大に食堂を騒がせ、曰く「ダツパは食札を分つ法を知らざること甚だし」と、されば人々は食札の籠をウダインに委ね「よし、然らば汝は今日より札を分つべし」といひぬ。

ウダイン其日よりダツパに代りて大眾に食を分ちしが彼は分たんとするや、何れが優れる米なるや又劣れる米なるやを知らざりき、又倉の何れによき米貯へあるや否やも明ならざりき。彼は順番を定むるにも亦何れの倉に各の僧の番來りしやを見分けがたかりしかば、彼は僧等彼等の座をとりしとき、壁或は床に傷つけてかく／＼の種類の米はこゝまで來りぬと記憶せるを常となしぬ。されど僧の人数増減するときは彼の目標も大に狂ひ標に従ひて食物を配當すれば僧等正しき分け前をうるあたはざりき。

提婆尊者

阿闍世王

雨行大臣

守門者

彌陀釋迦方便して

阿難目連富樓那耆婆

達多闍王頻婆娑羅

耆婆月光行雨等

大聖の／＼もろともに

凡愚底下のつみひとを

逆惡もらさぬ誓願に

方便引入せしめけり

釋迦韋提方便して

淨土の機縁熟すれば

兩行大臣證として

闍王逆惡興ぜしむ

人生には常に此悲劇が演ぜられて居る、而して監獄は最も親しき舞臺である。二十世紀の五濁惡時惡世界に於て清淨眞實の信仰が起るべき最初の場所は、監獄を措きて他にあるまい。敢て有罪とか無罪とか云ふことには拘はらぬ。亦必しも入監者ばかりが救はるゝのてない、教誨師でも司獄官でも皆同様に救はるべきである。吾人、特に監獄關係の人々は一般社會の人よりも先に信仰に入らねばならぬ方便引入の恵に浴することを感じる次第である。聖人の御心には提婆阿闍世を始として、兩行大臣守門者に至るまで皆大權の聖者である。聖人が五年の流罪も畢竟師教の恩致、如來の善巧方便と感謝したまひしは畢竟人生の上に此の盡十方無碍光を認めたまひし告白である。而して現時監獄に於て司獄官も囚人も乃至之に關係の社會の人までが、すべてが此如來の光明を仰ぎた時が、即ち信仰機縁純熟の時到了たのである。

されば僧等は彼に、「ウダインよ標は時にはあまり高く、又時にはあまり低し」「よき米は彼の倉にあり、あしき米は此の倉にあり」等教ふれどウダインはそれらに耳を傾けずして「我は汝等を信せず、我は寧ろ標を信ず」といひぬ。僧等は遂に怒りて彼を食堂より追ひ退けて曰く「ウダインよ汝が札を分つ時は我等は相當の分け前を受る能はず汝は役に適せず」と。かくて食堂のあまり騒がしかりしかば世尊怪しみてアナンダに問ひたまへり。アナンダ其理由を告げ奉りぬ。時に世尊のたまはく「アナンダよウダインは今彼の愚鈍なる爲に他に損失を與へしのみならず、前世にも同じことをなせり」と。アナンダ世尊に乞ひ奉りしかば世尊有轉輪廻の中にかくされた一事を語りたまへり。

昔ブラマダツタ、ベナレスに王たりしとき我等の菩薩は、彼の估價者なりき、彼は馬、象の類、又寶石、金、の類等に代價を定め持主に適當なる價を與ふるを常とせり、

今此王は貧慾なりき、されば王は貧慾のあまりあもへらく「もし此估價者に任ずるときは必らず我が富も盡くることあるべし、我は今一人の估價者を任ずべし」と、王はすなはち窓をあけて王庭をみまはしに、一人の鈍き貧慾なる田舎者のよぎるをみとめしかば愚かにも彼を估價者とせんと思ひぬ。王は彼を召して役に當らんことを問ひしに、野人は直ちに諾なひぬ、かくして王の財は悉く此愚者に托されぬ。

これよりのちは愚人馬象等をみるにも其等の眞價を顧みず、彼の欲するまゝに價を定めぬ。或日北方の原より馬商人

五百頭の馬を率ゐて来りぬ。王愚人をめて馬の價を定めしめぬ。然るに彼は五百頭の馬は一枡の米に代ゆべしといひぬ。馬商遂に先の估價者即ち菩薩に行きて彼に事の由を告げ、いかにすべきかを問ひぬ。

「彼に賄賂を與へよ、而して彼に乞ふべし、我は此多くの馬は一枡の米に價すと知る、然れども我は君に一枡の米は如何程の價なるかを聞かんと欲す、願はくば王の前に於て價を定め給はんことを」といふべし、若し彼諸さは王の前に彼と共に行くべし、我亦彼處にあらん」と菩薩は懇に教へたまへり。

馬商菩薩の忠告をうけ估價者に賄賂を與へ教へられし如くいひぬ。愚人賄賂をうけて曰く、よし汝の爲に一枡の米に價をつくべし」とさらば我等は王の前に行くべし」とて彼と共に行きぬ、菩薩及び多くの他の大臣等も座に列りぬ。

馬商は王のみまへにひざまづきていひけるは、「オ、王よ我は一枡の米は五百頭の馬の價なる事をしる、然れども、こひねがはくば王よ、一枡の米は幾何の價なるかとひたまへ」と。

王は如何なる事のありしやを知らずして估價者に「如何に估價者よ、五百頭の馬の價は幾何なるか」と問へり。

「一枡の米なり、オ、王よ」といひぬ。

「よし然らば一枡の米は幾何なりや」

「一枡の米は全ベナレス、城壁の内外共に價す」と愚鈍答へぬ。

話はかく進みしなりき。即ち先に馬は一枡の米に價すといひしは王を喜ばしめんが爲なりき。後に賄賂をうけしときは馬商を喜ばしめんが爲め一枡の米を估價するに全ベナレスを

以てせしなりき。時にベナレスは十二リーグの砦を有し、土地は郊外廣さ三百リーグなりき。然るに彼馬鹿者はかゝる大なるベナレスの市郊外すべてを以て一枡の米に比するとは何ぞや、

こを聞きて大臣等掌をうちて、笑ふて曰く「我等はひろき地と王國とは價するに以上のものとおもひぬ。然るに此大なる名高き貴き市が彼の計算によりて米一枡に價すとよ、オ、此估價者の智慧の深さよ！などて彼は永く役に止まること能はん、眞に彼は我等の王に適す」と彼等は懸笑せり、

然る時に菩薩は此句を發したまへり。

米一枡のねうちをとへば

全ベナレスとその砦

五百の馬のねうちをとへば

その一枡の米にひとしと

然る時に王は大に耻ぢ直ちに彼愚人を退ぞけ、菩薩を估價者の役に任じたり、かくして菩薩は次第に彼の行によりて過ぎぬ。

師此説教を終へたまひしときのためはく、愚かなる野人とは愚者ウダインにして、賢き估價者とは我なりき」と。



告白

踊躍歡喜

上

中村 吾一

本日九段坂の求道會で、私の大恩人なる近角先生に御逢ひ申した處が、是非君の信仰の狀態を告白せよとの、御注文でしたけれど、筆の足らぬ、見識の低い、狂氣の様な私には、仲々思ひも寄らぬ仕事であると思ふ心と、私の告白に依つて愈々中村は坊主だ、キ印だと同僚上官に見下げらるゝまでは構はねど、こう思ひぢがはれては、此の清き佛心が人に感じにくくなる。すると人様はやはり淺ましき、苦しい生活をしつゝけなざるのがいとしかや、只今夜更けて一大心靈の御命令によりて、耻しながら懺悔とか云ふものをさして戴きませう。

若しや私の告白によりて、少しでも、佛天の如何程安樂て如何程嬉しくてやりきれないもので有るか云ふ事に御氣付の方が有れば、私は躍り上がつて喜びます。

さて私は九歳の頃は、非常に徒らな子供で有つたのと天性愚鈍て有つたのとて、思ひも寄らず落第をいたしまして學校の人の居ない白壁の横で袴をつけてニコニコして居る友達を羨ましそくに眺めて居ました時、私の下の家の友達で同年同級の一歩仲よしの或る小供が君は氣の毒だと小供心に云つて呉れたとき、涙ながらに『しかし君には負けぬ』と一言云ふ

てから打つて代つて試験毎に變つた成績で暫く居た様に思ひます。之れから十一才だとおもひます、母の膝下を態と子供としつけをする爲めとか云つて離され、遠い學校にて先生の御飯たき、澤庵出しの職を仰せつけられた、或時は御米ときなどして手の痛さに、朝に河邊で手を合せて佛様神様を拜みましてドーカ助けて下さいと心に念じた事も有りました。

其折は日本は海國だから海軍大將になる氣になりました高等小學校は譯なし卒業し、田舎小供の悲しさ、何人でも海軍士官になるならば、是非東京に遊學しなければならぬものと思ひこみ、十六の年、信心一途の祖父祖母の泣くのもかまはず親類もなんにもないのに、九州の山奥から廣い東京に出て來て非常に難艱苦勞と勉學する事五星期でした。遂にかくなづかしい家人が血の如き學資によりて中學校も可なりの成績で卒業し、愈丁度十年以來忘るゝ暇なきあの活動の原動力を養成する江田島に往きました。實に此時は天にも昇る愉快な境遇になりました思ふには何に僕だつて勉強すれば「スタッフファイナー」にも成れれば、大將にも成れる花の如き「ホーム」も造る事が出来る、やる可しくやるにしかずと確信、非常に奮闘して見た。けれども實に才子多くて、自己の實力はそろ／＼本質を顯はし、試験毎に番が下る、下れば下る程くやしい、くやしいから勉強する、勉強すれば夜ねむれない。ねむれないから頭の働が鈍くなつて愈是では參謀や大將處が大尉止まりだ。大尉や少佐や中佐でへこたれるのが解つて居れば、戦死して後、人に送られたいと思つたり。又夫は實に不公平なものじや。同僚が氣にくはぬ。などの不平がばつばつ出て來

て遂に哲學がやつて見たくなり、理屈をこね廻して見たり、天才の發揮などに努力して見たりした上げ句僕が大嫌の糞坊主の信するあの宗教に依つて安慰を得ようと掛つたのが實に御導でした。

耶蘇も一寸中學時代英語の稽古旁往つた。山寺で佛教學生の奇説も拜聴いたしました。ある日曜、佛書を讀む爲に島の寺に佛書を拜見にいつたのが抑の御縁で小僧が嫌といふのを無理に築波善海様と申しやる名は知れて居ない様ですけれども、實に有りがたい吳の布教師様の前に出されたのが實に彌陀の御はからひ事である。「アリガタイ」「アリガタイ」「モツタイナイ」キレナイ直に御人格の尊さに打たれました。坊主は慾張りが多いと思ひ升至、此好い方は生れてから初めてと思ふて何とも云へぬ感じがいたしましたから、一月一回の日曜に先生の御渡鳥を待つて日曜には直にかけつけて一日先生と愉快に暮さして戴き、友達は皆御母様の許にのみ歸るのに私は獨先生の御家に同居し朝となく夕となく御講話を戴かして貰ひましたれど、くやしい事には未だ死ぬるのが嫌、野心満々、先生のあれ程ニコニコされるのが不思議で堪まりません。

其れから一寸故郷に歸つて片足棺に入れられし老人方に「吾一は非常な信心家になりました」などと、さまでもない事を十倍にして申上げたたら、喜びなさる事限りなく、私も従つて義理盡して信心せねばならぬ「ハメ」に成つて少々苦しかつたけれども兎に角、無茶苦茶に、私の偽を眞に受けられて仕末

のがあるものかと一方では打ち消して居る。「困つたな」と僕は迷ふた。然し築波先生と中尉は非常に愉快で居られる實に不思議だ、何にが何んでも、此様に夜がねられなければ、身體の方が續かぬ、豪い坊主は非常に熟睡するといふが、僕も偽でもよいから、安樂な方に行きたい、然しイクラ本を讀んだり、説法を聞いたりした處で、内心から溢れ出た信心でなければ駄目だから今日から考へる方を専門にやろうといふ決心の下に三週間位夜もねむらずに考へて斗り居た。

或る夜、近角先生の信仰の餘瀝を緋た處、詩的の信仰と云ふ題の處に「世の中に宗教と云ふ奴は實に面白いもの、此れに迷ひ込めば、非常に快愉なもので世の愚夫愚婦には非常に必要でも有るが自分見た様な文明の教育を受けた人には解らぬ、又不必要だなどと思ふて居る人と、宗教は幽遠なる學理で有るとのみ思ふて居る人とは、ドレ程學者でも、結局皮想の信仰で歡喜が浮いて來ない」と云ふのにムカツト氣が附いて、私自身が直にこうで有る。皮想の状態に有つては、無宗教家より餘程苦境だ、此れでは實に駄目だと思つてから、そんならどうしたら實想の信仰が得られるかと煩悶し始めました。次の日曜築波先生に逢つてそれを申しあげると、只もうニコニコして居らして「其れでよろしい」と濟まして要領を得ませんから、又歸校して瞑想に耽つて居る事が劇しくなりました。又近角先生の懺悔錄を同僚がねむつてから、寝られぬ苦しさに讀みました。

其中「予の信仰の經過」といふ處に「車上ながら虚空を望み見た時俄かに氣が晴れて來た」との數字に感動せられ、近角

が悪い。之れから此んな偽など大恩ある御方に申上げては濟まぬと云ふ心から又勉強せねばならなくなりました。

之れから苦しい時とか淋しい夜などに星を仰いて唱名いたしました。所が私が歸校した後で「一生懸命、祖母が私の入信を喜ばれて居つた」といふ事を妹の手紙で知つた時の耻かしさ、嬉しさまぎれに念佛致しました。其折柄一番おしたひ申して居た祖母様はトウ／＼此世を去られました。其時の悲しさ、實に非常で、其悲しさまぎれに唱名が浮ぶ様になりました。一日として祖母を忘るゝ暇は有りませんでした。然し未だ眞に佛陀の在否が明確でない。そうこうする中末席でトウ／＼卒業試験が済みまして一月ばかり學校に置かれて居たとき、種々考へました。兎に角僕はドーモ才が足らんらしい。でも考へて見れば僕一人は大尉でヘコタレてもよいが。

兩陛下の軍人に對する御親切。國民が血の汗を流して出して呉れる御骨折。實にモツタイナイ。かたじけない。之れに僕見た様な平凡なものでは御恩の返し様がない。此れでは陛下下にも濟まねば五千萬の國民にも濟まぬ。夫れかと云ふて勉強して僕の伎倆は高がして居る、僕には御恩を返す策がなかつた。又築波先生始め道の兄なる海軍中尉の御卓識も耳の痛くなる程承り深遠なる博士方の御書物も充分讀みながら、ドーモ僕には少し迷信らしくて、佛などが在るかないか僕にはしれぬ。然し最も僕の信用して居る高僧も中尉も、必らず有るとの斷言にて、一ッ念佛すれば一歩丈け高まるなど、トンデモ無い事を云ふて居られる。博士もこう云はれた、然し理論など冷靜な立場から見られる學者は佛とか神とか云ふも

先生と云へば、文學士だし物理もやれば、化學も知つて居るつしやる、現代の大信仰家が狐につま／＼れた様な事もあつしやられまい。して見れば未だ僕は考へ方が足らぬので、佛様の御光明が見えぬので有らふ、ヨシ來た、僕も人間だ、近角先生も人間だ、此夜は寝ずに御光明の見えるまで考へよう、之が爲身體を害して死んでも構やせぬ。ヤレ／＼、モウ午前二時孤島の淋しさは又一入である、ドレ／＼と欄下からピカリ／＼する星、金色の鐮の様な御月様を拜し、今に佛の御光と變化しやしないかと一生懸命に睨み合して居る、けれどやはり星は何處までも星、月はドコマテモ月です。これじや、やはり駄目かなと力を失して床に歸りて瞑想して居る中途に「總員起せ」の喇叭が鳴つた、毛布を夢の中に疊み、精神状態が一變し、丸て雲の上を歩く様な變な氣持で松原の人影のない處に例の御本を拜讀したり又考へたりいたしましたけれど、中々佛光はあらはれませんが、ガツタリしましたけれど、辛棒して事業中にも考へ方を連續いたしました。

前にかへりますますが、其夜何んで其様に眠らなかつたかと申しますと其前夜丁度モ一三日すれば、江田島を辭すると云ふ夜に信仰の堅固な中尉が態々吳港から私共一同に御別れに來て下さつて、八方園といふ淋しい林の中に入つて中尉が赤心を發表せられ、懇々吾々が卒業後の注意を云つて下さつた。其時卒業生にのみ逢ふつもりで、此が佛の示導でしようか僕は直ちに下級生中一人だけ溫習室から引き出して中尉の話を聞かせました。中尉の講話中僕は用があるため、非常に惜しかつたが、義務の方が大切と思ひ、一寸其場を逃げて居た、

其の間今云ふ下級生の御方は、きいて居た、此人は其の夜佛天に遊ぶ様になつたばかりで、私は、其人が躍り上つて喜ぶ様になつたのを夢にもしらず、尙昨日までの彼と思つて居ました。

話は又先に返りまして同じく下級生で今一人私の親友が居ました、此人は無宗教主義なれど寺には先の喜んだ下級生と三人連れて熱心に往つて承つて居た、兩人とも夕食後、大概散歩、宗教談を（今日考ふれば耻しい次第なれど）兄様顔にやつて居りましたから、其翌日も尙下級生を信仰上弟ともふて滔々と話しました、すなはち此二十日間夜眠られず、昨夜は其絶頂に達して居る事を告げました、其夜は早や明後日は御別れと云ふ夜で、九い奇麗な月が一輪かゝつて星も淡く海は丸て鏡の様で實に悟りも開けそうなる光景でしたが三人が月下の松原の間を消遙しながら話すので有ります。

彼喜んだ友、其の時タツタ昨夜佛様の御慈悲を喜ばして戴いた日頃女の様な順従な友が燃ゆる様な鋭い勢で云ひました。

「中村さん、あなたは私より級も上で宗教にも私はあなたの御蔭で縁づきました。實にあなたは此大恩人です、然るに弟の僻に生意氣な事を云ふと思はれませうけれど、あなた程切實に道を求める方は兵學校に一人も居らぬ。然しあなたは口に築波先生、中尉と云ひながら、大恩人たる先生中尉の御話を聞かれる時に心中ではドーデス、ナーニ甘い事を云つて居るけれども、彼人々だつて慾もある、美食もしたい」など思はれるに違ひない等云ふ考があらなるから、一年きいても二

ひ、遂に歡喜の中に夜があげました。

翌朝御世話に成つた寺に飛て往つて、今迄惡かつた事を告白しました。其れから二ヶ月を立ちますが、いつでも歡喜が抑へんとして、溢れて來ます。

要するに非常な野心家が全く無欲になり、非常な沈鬱家が非常に無邪氣に生れ變はつて來たので、全く自分の仕事でなくて、佛の助力であると思へば、身に餘る御恩を感謝するばかりです。

然し事々物々が嬉しく、誰でも懐つかしく可愛想に思はれ仕方の無いやうな時もあります。けれども近角先生は全く今の歡喜が變はつて仕舞ふ時が來ると、仰しやるので、實に心細く感じます。だから吾が心を知つて下さる御方は、吾が心の父上母上ともおもはれ、微笑せられる方を見れば、嬉しくて懐しくて手の着け様も無い程に思ひ詰め、若し自分の云ふ事に一人でも感じて下さる方がありますれば私は天にも昇る様に喜びます、然し皆佛様の力とのみ思ひます、私も本月二十五日から皆様に御別れいたし、遠洋航海に出かけねばなりません、歸國は此年の七月三十一日の豫定で御座ります。幾何、繼が揺れ出して如何なる海上の苦境に陥る事が有つても、決して佛様の慈光は一刻も離れず私を保護して被下る故力強く、念佛を稱へながら職分を盡し、目出度初航海をやつて参ります、未だ御目にかゝらぬ父上母上兄様、姉様、ドゾ御苦勞遊ばされずと早く此安樂の天地に入つて下さい是が私の御願で御座ります、左様なら行つて参ります。

年きいても、煩悶されるばかりです、あなたは、ある煩悶のため、寢られぬ／＼と仰やるが此のまゝ、明後日は愈舟に乘られなけりやならんが今の様に睡眠が御出來になられねば定めし御病氣にかゝられる様な事になりやせんか其れを思へば、私共はあなたが御可愛想で御別れがほんとうにつらう御座ります、と聞きし時私は臍を鎗てつかれ様な心地がいたしました。此二時間の劇話中他の一友は耻しそに「私も今彼のいふ通り、私自已は御存知の通り、頑固な無信仰な苦しい下界に沈んで居つても構はないが、あなた丈はドーカ今一步進歩した信者になられて、夜でも安樂に寢られる様にして、江田島を出し度い。」其言葉に感動して、涙が胸につかえ、言はんとすれども噛みしめた口が開か無い。嗚呼今が今迄信仰に於て弟と思つて居つた友達から弱點を刺されたくやしさ。又自分の高慢であつた事、又両親が僕のやうな不遜な愚鈍な奴を見下げもせず、僕の身 pensando 思つて呉れる親切の有り難さ。雪よりも潔白な友のいとしい心が忝なくて、涙ばかりで胸も張り裂くやうでした。遂に喇叭に呼ばれて寢床に入れど、萬感湧出して、何うにも斯うにも手の付けやう様がない。今迄他人に對し少しも親切になかつた事。大恩有る先生や、親切極まる中尉の非常に難有い御言葉を輕蔑して居た私の耻しさを思ひますれば、眠らんとすれども、朋友と云ふものは斯く迄親切なものか、と思はれ、寢らんとすれど兩友の形が佛陀と化して私の前にうろ／＼し、嬉しくて忝なくて仕方なく、又今迄佛を疑つて居た事の淺間しさが胸に差し迫り、何うしても寢られない。よし／＼寢れば又此の状態が醒めはしないかなど、思

下

今朝愈々東京を立つといふので、忙かしき中にも近角先生や奥様に目にかゝり度く、鳥渡伺ひました處が、意外にも私に是非目にかゝり度いと言つて、來られた四歳ばかりの小供連れの夫人が有りました。それは昨日九段の求道會で私が新に佛光に接したる有様を、ありのまゝに告白しましたのを御聞きになつた方でありました。其の時の話を書きましよう、時間が少いので、僕は午後一時には是非新橋から横須賀に行かなければならぬので、充分話す時間が有りませんでしたから、熱心なる其夫人は僕を電車で見送つて下さいました。

人多き電車の中で、御苦勞の模様を承はれば、何んでも小供が三人もお出でなされるのに、夫たる方が藝者に狂ひ出して。近頃では夫の方が少し其御夫人の事を思ひやらるゝ様になつて、家に歸つて居られた處が、其の藝者様、死ぬるの、生るのとおだてるので、又夫の方が出て行つて、近頃は家に寄り付きませぬのです。私だつて充分初から、親切にして上げた積りですけれど、何にかお氣に召さぬのやら、判りませぬ。あまりいま／＼しくなつて、財産の半分も費ひ盡す考も出ますけれど、子供が可愛相で、涙の中に、つらき日を送つて居ます。宗教は人を樂にすると思ひますから、苦しまぎれに、お寺にも参りますけれど、何う云ふ風にすれば貴方のやうに愉快になれるのか。今日は赤の他人の貴方の御宿所を伺ひまして、何うか私も貴方のやうに躍るやうな愉快な身に仕て頂

きたいと思つて、先生の宅に伺ひました處、計らず先生の宅でお目に懸つた次第ですと、温順な御夫人が涙ながらに子供をかゝへて、電車の中で申されたのであります。私は其處で申上げますのに、

人は絶對的に悪人は少ないけれど、偶には情慾にかられて、道ならぬ事をする事も有ります。兎に角人が自分に情無く當る時に、自分の方で、「私は正直にして居るのに」とか、「私の方に理屈は有る」とか思ふものだから、直ぐと人が恨めしくなる。恨まれた人は又此方を恨む。兩方恨むから、焼氣になつて、遂に自分が死ぬか、向ふを殺すか仕度くなるのが、世間普通です。之れて、奥様、斯う思ひ代へては如何でせう。夫は宗教も糞も知らぬ人だから無理も無い事、併し私は宗教に入つて居る。向ふは赤ん坊、此方はおとな、赤ん坊から撲られたと言つて怒るのは、怒る方が餘程馬鹿だ、打つた赤ん坊の方が餘程無邪氣で、天真爛漫です。人の手前も憚らず、赤ん坊の夫を取らまへて、どたんばたん、出るの入るのと騒ぐのは、つまり心配では有りませぬか。此の考へのつくりが、宗教の實に有り難い處です。と云ふ様な事を熱心に申上げますと、其御夫人は涙をばらばらとこぼされて「ハッ」と溜息氣をつかれ、之で分かりました。私が悪ういたしました」と、翻然罪を我身に著て、立所に信仰に入られた有様を拜見致しました時の私の胸中は、實に嬉しくてやりきれなかつた。然し傍に居られた方々には定めて御迷惑な事でないましたらう。夫人は又仰つしやるに、「夫では何うして稱名念佛を致しますか」と申されるから、私は

夫はね、若し貴方が此んな夫を持たずに居つて、心の善い方を持つて居つたら、定めて今頃は家庭圓滿で、何の心配も無かつたでせう。そうしたら何うでせうか、とても、お寺などに貴方は參ら無かつたでせう。藝者が來なかつたら、何うして此の有り難い佛様に、氣がつくものですか。又御夫人の義妹とやらが、非常に邪見な女で、無暗と夫人をいじめると言はれますから、「其妹さんが若し親切な方であつたら、貴方の御心配も、定めし少くもいましてらう。そうすれば又宗教心が起ら無かつたでせう。ですから今日迄、虫がすかぬと思つて入らした夫も、藝者も、妹様も、實に有り難いお方で、大恩人です。婦人が此電車の中で、男子から席を譲つて頂いてさへ、一言有り難うとお禮を申上げるのに、此一大事に押し付けて下さつた三人のお方を恨むところか、今から御歸りなされたら、今迄は私が悪うしました、私が非常な貴方の御親切を知らなかつたので、私一生の誤り、此の後は何うか御氣に召すやうに、藝者を此の家に呼び申して、楽しく暮し下されませ。私は無理に出る譯では有りませぬけれど、私が居る爲めにお氣に障りなかつたら、お氣の毒ですから三人の小供と出まして、女の操を正しくして、陰ながら夫婦中の善からん事を、神かけて祈り上げます。若し又藝者が、あばれ込んで來たら、神様御入來のお積りて、充分今迄のお託を申上げなさい。茲に大事な事は、こうしたら定めし又夫も氣が付いて、私の心に感心遊ばして、又私を呼びに來るだらう杯との、慾が起つたら駄目です。凡て親切は何處かに要求が有つては役に立ちませぬ。無我の親切なら、決

して神佛が貴方をお見捨て下さりませぬ。決して神佛は心の清き婦人を、いぢめる様なお方では有りませぬ。若しや出られた後で、財政にもお困りになるやうな事が有りますれば、此中村が嚙つて置きませぬ、私の月給を失禮ながら差上げます。決して私をお見捨て下さるな。又貴方がいくら私に逢い度いと言つて、お探し下さつた處が、此の廣い東京で、一面識も無い私の事故、到底貴方のお力では駄目であつたのである。若し又午後、近角先生に入らしやつたら、私は横須賀に歸つて居つたのです。に、佛様が二人を逢はして下されたのです。佛様は悪い氣の浮きた男を貴方の夫に持たせたら、貴方が宗教の安樂界に入られるか知らんと思つて、さうして下されたけれども、貴方はまだ駄目であつた。之て又妹さんを邪見にして見られたが、未だ駄目。仕方が無いから、彌々不憫と思はせられ、夫を藝者に狂はさしめられた。之で貴方は漸くお寺参り始めなされた。然しまだ心配で、夜も眠らずに、子供の事考へなされる。止を得ず、此の中村といふ奴に、御命令をなされ、此電車の中で、貴方は今迄御自分が悪かつた。恨めしいと思つてお出の方が、實は大恩人であつた。實に濟まぬ。道理が解つて見れば、成る程世の中に思ふ事は無い。佛様は、いやでも應でも、私の爲めにして下さる。此の佛様の御苦勞を謝する爲めに、此宏大無限の御恩をお禮申す事も出来ぬ程、有り難い、嬉しい。仕方が無いから、南無阿彌陀佛と言つて、お禮申すのであります。貴方はお子供の事はかり心配なされて居られるけど、母親が苦勞した事の無い子供は大きくなつてから、必ず骨なしの、意氣地なしの、母に終生

心配ばかり懸るやうな青年になります。けれども今貴方が非常に苦勞遊ばされて居る事を、坊ちゃんが年を取ると従つて知りわけて、母様は實に親切だ、世間普通の母と異つて、僕等の爲めに一方ならぬ御心配を遊ばして居られると、いふ事に氣がつけば、僕も早く勉強して、母様の御安心なさるやうにして上げねばならぬ、といふ精神が養え立てば、之れて非常な大奮發心が起り、必らず我が子ながらも、見上げた子供と、子供の真心に惚れ込むやうになり、此も私が苦勞させて頂きたればこそといふので、一入彌陀の大慈悲が有り難くなつて、寝ても醒めても起られぬ程愉快にならせて頂く事が出來ます。若しこの様な樂境にならぬでも、決して佛様は坊ちゃんを爲め悪い事はなされませぬから、夢々御心配には及びませぬ。

夫人は能く解かりましたと言つて、僕に晝飯を御馳走するやら何やらかやら、種々にもてなし、歡喜面に溢れ私は實に愉快でありました。お別れ言葉に猶ほ申上げますが

決して中村さんは親切な方など、思はれるなよ。中村は實に不親切極まる奴なれども、一度佛陀が宿られし其時は、實に偉大なものですから、私を親切と思つたら又私が不親切になつた時駄目である。佛様の方にお禮申して、決して中村にお禮するには及びませぬと、私への郵便の上書き（在外帝國軍艦松島、横濱郵便局氣附、海軍少尉候補生、中村五一）を書いて上げて、斯うお書き下されば、私は世界の何れに航海して居ようとも、拜見いたす事が出來ますと言つて、お別れ申しました。其の方の御名前杯も申されて居たけれど、私は

はや忘れて仕舞いました。

此の婦人は大丈夫と思つて居ますけれど、世界には未だ此んな僕の姉妹方が、澤山有るからと思へば、軀に歸つても、お氣の毒で、心配で。定めし今頃は夜の目も寝むられず御苦勞遊ばせて居るのか。嗚呼世の姉妹方、早く此の僕のやうな愉快で心配のない樂天地に来て下さいと、手を取つて引張り度くなります。如何程私のやうな、智慧の無い、不行届のものが、軍艦の上で力味んだとて、決して姉妹方が皆お分りになる事でもありません。キ印の愚馬鹿奴と叱り下さるかも知れませんが、私は常識を脱しては居ませぬから、御安心下さいませ。

悲母の引接

美濃島與之助

美濃國郡上郡高鷲村の人、小學教員の職に在り、一月早々山路二十有餘里を経て岐阜に出て、東上して唯予に面謁せんか爲に訪はる、近角歸郷中なりしかばその歸郷を待受ける、乃ち求道學舎滞在三日晝夜歡喜解名して歸國せらる、其淳樸敦厚真宗信者の規範也

私の母上が誠に強信なる人ですから、私が乳飲兒の時より御念佛にて育て下され、乳を與へるにも、頭に口を付け、御念佛を稱へながら飲ませて下されしと云ふとであります、而して、私が少し出言するとの出来る様になりてからは、色々な方便をして、御念佛を稱へさせて下されました、追々成長するに従ひ、御法席へ參詣するとを、御奨め下されました

ば、信が得さして貰へるかも知れん、併し、御慈悲から頂かして貰ふのですから一年立たぬ内に得られるかも知れん云々と、誠に親切なる、御訓誡を與へて下されしなら、其の御訓誡が骨身に答へて、實に驚き入りました、それより殆ど一ヶ年斗り、眞に苦悶の状態に陥り、求法心も已前に數倍し如何なる困難にも打ち勝ち、時々寢食を忘れて、御育を蒙りました、斯の如くして、私が三十三才の秋、或る日曜日に、亡兄三周忌の、續經を請はんとするの日に遭遇し、母上臺所の爐邊に於て、私一人に對し、親切を極めて、親様の御心を御取次下されしに、圖らず、一種言ふべからざる感に打たれ、瞬間に永日の苦悶忽ち消失し、始めて歡喜の涙に咽び泣き入りました、母も同じく一方ならぬ、喜び泣きをして下されました、此の時の、私が心中の模様、委しく聞いて頂きたき事は山々なれど、兎ても言筆を以て、述べ盡す事は出来ませぬ、多年の間、安心さして貰はねばならんと氣張りし心も、親様の御心が知れ兼ねると嘆きし心も、直に蔭を失ひ嗚呼ツライと云ふて、日を送りし身が、嗚呼アリガタイと、世界中の幸福者は我なりと、喜ばさして頂き、暗き心を邪魔にして、親様に氣兼ねし身が、暗い心を見せて貰ひ、却りてそれを御縁として、御慈悲は樂まして頂き、世間へ對しても、氣遣斗りして居りし身が、如何なる人にも、快く交際さして頂く様になり、今日の職務も、氣樂に勤めさして頂き、實に有りがたく、只管懺悔感謝の情に堪へません。

偕其後は色々の場合に喜ばせて頂きましたが一つだけ申しますれば、かく一旦喜ばせて頂いたもの、時としては喜が消

から、子供心にも何でも、大切に御法を聴聞さして貰ひ、信を得さして頂かねばならぬと云ふ心になり、十五才の時、御本山へ參詣し、總會所の役僧様に對し、信を得さして貰ふには、如何なる職業をして居て聴聞さして頂くが、最も宜しくありますかと、御尋ねしましたら、そうすると、盗人の眞似をする、盗人になる、信者の眞似をする、信者になるから信者になりたくば、信者の眞似をするがよい、職業は如何なる職業でも宜しい云々と、御親切に御教示に預りまして、それより、母上を始め、有縁の御方々に御引立を蒙り、程なく、何でも大事をかけねば、安心は出来ぬと云ふ風に片寄り、獨身でなければ、大事に聞かして頂かれんの或は公職の身分では、到底聴聞は出来ぬなどと、變な思想になりし事も度々ありました、斯く色々とする間に、御教化の道理が、大略分りしもの故知らず、それがあて力となり、我機で信心を作たりたり、失ふたりせし事も、屢々ありました、

然るに、私が三十才の年、兄上が、永々肺病に罹り、醫師の手も切れし處非常の苦悶に陥り、日夜母上に、御育を受け居られしに、或る有名なる、信仰家なりと、世人の敬慕する御僧様に、御引立を蒙られましたら、不思議にも、忽ち苦悶を離れさして貰ひなされ、其の後は、此の世も未來も大安樂じやと、日々喜び居られて終に最期を遂げられました、殊に邪見な私も、眼前にかゝる御引合を得て、一層無常を觀じました、其後一年餘り経て、少年の時代より御縁厚き遠方の御僧様が、私の村へ御來錫下されて、兼て自力にて堅め居る、私の決心を打ち崩し、この後猶二十年間も、一生懸命に聴聞すれ

えた様な心持がして、自分で自分の信心を氣使ふ様なこともありました、こそで私の母上から此の如き御育てを蒙りました、母上が申さるゝには私が此美濃島家へ嫁入して来たとき、たしかに此家の人に爲て貰ふたるなれど、初めは慣れない間は氣が落附かぬが自然々々に家風に合ふ様に育て、頂いたが御前もたしかに御信念は頂きが段々落附く様に慣らして下さるから安心せよと聞かして下さつた我母は幼年の頃より後生に心掛の人であつたを祖父が見込んで貰はれたのであります。

今後益我身の御育を蒙ると共に有縁の御方が、一人も多く、此の尊き御慈悲を信じ給はん事、千望萬願の至であります、爰に先生の御思召に依り、從來御育を蒙りし、一端を告白さして、頂きし次第であります。

釋迦彌陀は慈悲の父母、

われらが無上の信心を、

經日月光の身には、

十方の如來は衆生を、

子の母をおもふことにて、

現前當來とおからず、

種々に善巧方便し、

發起せしめたまひけり。

念佛三昧行せしむ、

一子のごとく憐念す。

衆生佛を憶すれば、

如來を拜見うたがはず。

慶 嘆

九 醍醐妙味

前來述るか如く佛の眞實慈悲を味ふか佛教の眞髓である。佛の眞の恵を頂く外に佛教が無ひ、これ以外に佛教の眞面目がありと云はゞ、それは皮を褫いて居るか、肉を褫いて居るかである。

これに就て昔から天臺宗に於て五時を立つるときに用ゐる五味の譬といふがある。それは牛より乳汁を出し、乳より酪を、酪より生酥、熟酥、最後に醍醐を出す、その如く佛より十二部經を出し、十二部經より修多羅を出し、それより方等般若涅槃を出すといふのである。是はもと涅槃經にある譬で、天臺の智者大師は、自分の所立の判教たる五時の次第に當て込んで居る、私は思ふ、天臺の譬喩のとりようからが適切でない、曾て本文批評を試みたる富永仲基は、此涅槃經の五味の譬喩は、佛教が漸々上の方へへと架上して行つたといふ説明であつて、佛が斯くの如き次第を履んで説法したといふことではないと云ふて居る、此批評は甚適切なる、いや

る、十二部經をしぼりあげたが涅槃經である、富永仲基の云ふ様な經本の前後と云ふたに非るは勿論であるが、佛の説法の生粹は涅槃經であると云へば、この譬喩の意味はそれで盡さるのである。乃て釋尊一代の佛教は何かといへば、涅槃の妙味であるといふことは、是は私が獨り此の如く云ふにあらず、何人か云ふてもこの點は異論あるべきでない、南方佛教でも北方佛教でも此點は皆一致である。

扱其涅槃といふ味を如何にして味ふか、前に云ひし一念横超といふはこれである、親鸞聖人は正信偈に於て

能く一念喜愛の心を發しければ

煩惱を斷ぜずして涅槃を得

凡聖逆勝齊しく廻入すれば

衆水の海に入つて一味なるが如し

といふこれである、佛陀の御恵を得れば、煩惱を斷ぜずして涅槃を得ることは凡夫聖者の別なく、齊しく頂くことの出来る利益である、涅槃經に譬へば人七子あらんに齊しく之を愛して異ることあるなしと云ふてある、之によりて之を見るに涅槃經の五味の喩は全く佛教の精要は涅槃であるといふことを、喩へたるものと云ふて不可なしと信する

闍提釋尊一代の上で見たところ其所謂涅槃とはどこかと云ふに、三十歳成道の時、八萬四千の煩惱斷へて、八萬四千の光

あう云へぬことである、併し仲基は經本が出来たる次第の説明にして居るが、私はこれは實驗的の譬喩と考へる、それはどうかといふに、全體譬喩からが味ひである、牛乳を練りかためてクリームにする、譬て先か牛から乳汁を出し、乳より酪を出すといふように、それからそれへと順序的になつて居る、若し天臺の云ふが如くならば、牛か乳を出し、牛か酪を出し、乃至牛か醍醐を出すと云はねばならぬ、然るを五味の次第の譬へにこの五味相生を以てするは無理なことである、加之十二部經より修多羅を出すといふことも大に考ふべきことである、十二部經は釋尊が方々で種々無量なることを以て説法せられたを分類して、因縁、譬喩、本起、本生、方廣、未曾有法、廣説、等の十二と爲したのである此の釋尊が説法なされたを、牛より乳を出すといふたのである、その種々の説法を結集したのか契經即修多羅であつて、結集以前はちぎれ／＼た説法であつたを、之を集めて經文としたのは、恰も乳を酪にした如くと譬へたのである、それを味ひ味つて方等の經典が出来、其方等の生々しいクリームが更に熟したものが大般若六百卷であり、充分／＼熟しきつたところが涅槃妙味の醍醐である、故に涅槃の妙味は佛の説法の生粹であ

明の溢れたるところが佛の涅槃である、而して我々も此如來の光明に遇はせて頂いたところが、我等の涅槃である、光明中の生活である、佛陀一代の説法は佛陀の御恵み涅槃の妙味をば、種々無量に説き廣げたのである、或は婆羅門の爲に之を説き乃至或は旃陀羅の爲に説く、四姓の區別の非常なるありといへとも皆同一に佛の恵の中に入らしむる、況や男女老少善惡皆同様に佛の恵か頂ける、一切衆生皆味へる、これか涅槃の眞意味である、如何なる惡逆をも捨てぬ、大慈大悲が佛陀涅槃の味の極處である、而して其佛陀の大慈か事實的にあらはれたが涅槃經である、

釋尊一代の間に於て、アングリターマーが千人の首を取れば悟を得べしとの宣信よりして、九百九十九人までも殺害したが、最後に佛の教に遇ひ、發心して佛の弟子となつたといふ如き、其の他個々の事實は誠に多くあらんが世尊の一代に通じたる一大事件は王城の悲劇である、王舎の頻婆娑羅王は、釋尊出家の當時より、國を擧げて釋尊に譲りたいとまで云はれたる程の歸依者である、佛陀成道の時第一に感化を蒙り、誰よりも最初に精舍を立て、釋尊の教化を乞ふた人で、一生涯少しも變ることなき、佛教の厚き信者である、其頻婆

婆羅王の子が阿闍世である、又此事件に大關係のある提婆達多是釋尊の從弟である、提婆達多是相應の遣り手で、而も嚴格なる法律的人であつて、嚴格主義を以て佛弟子を訓練せんことを屢々釋尊に乞ふたことがある、提婆といふと直に惡人の如く思はれんが、彼のアングリタマの惡とは類が違ふのである、釋尊が四十餘年の說法既に了り、感化四方に普及し萬衆非常の渴仰の間に將に入滅せんとするとき、惡逆無道の阿闍世、眞實無比の韋提希、嚴格主義の提婆、最後までの佛教歸依者たる頻婆婆羅、是等の人によりて演出せられたる大悲劇である、實に佛教史上の大事事件である、此大事事件の結果が大に注意すべき點である、若この場合に於て佛教破滅の企を爲したる提婆阿闍世を佛陀が捨て玉ふたならば佛教の眞味が顯れずに終つたであらうが佛陀は大慈悲の光を以てこの惡逆のものを攝取し救済し玉ふたところで佛教の大精神が事實的に我等に示されたのである、この事實の委しきことは私の懺悔録に載せてあるから今之を略するが、少しく其要點を云へば、提婆が佛陀に反對して、佛の教團を碎き、剩へ佛陀を殺さんとし、又阿闍世を使喚して、父王を殺さしめ、母夫人を牢に投ずるに至つた、然るに後の時に及んで大惡疾に罹るや、

に理屈をのみ云ふて居る六臣の言は心に入らずして、獨り佛陀の惠のみか阿闍世の心に徹底した、此佛の御惠を頂くが眞の佛弟子である、眞の言は假に對し偽に對す、假とは眞に佛陀の御惠を味はざる聖道門の信仰、即阿彌陀の選擇本願以外の佛教の信仰は皆これ權假方便の教である、又佛教以外の信仰は皆これ邪偽の教である、偽の教は阿闍世がどれ丈聞ても安心が出来ぬ、佛教の中にも種々の法門あるが如くなれども、惡逆の阿闍世如きものまで、眞に安心に到るべきは、唯佛陀の御惠みを頂く一つである、その佛の惠の頂き振りは、三千年の昔日許りてなく、親鸞聖人も亦同じである、聖人も二十年來種々に尋ね求めたれども、外の教にては安心を得られざりし、最後に阿闍世が釋尊に遇へるが如くに、法然上人に遇ふて、一佛乗の大なる惠を聞て初めて安心が出来た、これが佛教の眞の妙味である、此外に佛教は無い、これか即ち眞宗である、親鸞聖人のみならん、私自身が廣大なる佛の惠に氣附かせて頂いた味が、矢張り阿闍世と同じことである

佛一代の最後に涅槃經を阿闍世王が頂いたも親鸞聖人が佛教の御惠を味はしたも私如き阿闍世同様のものが廣大の御惠を頂いた道筋も皆齊しく涅槃の眞髓である、其涅槃の眞髓

その苦しめたる母の厚き看護を受け、殺したる父の靈に導かれて、佛の許に行き、殺さんとしたる佛陀の爲に救済せらるゝといふ筋である、此の如き廣大なる出來事は、大聖達が態々巧んで演じて見せられた芝居であるが併し此事ばかりではない、三千年前の遠き印度の昔嘶の如く思はれんが、そのように遠く計り眺むべきでない、現に私自身は既に阿闍世である、阿闍世が廣大の佛の惠を頂いた心持が即私が頂いた心持である、この出來事が直に自分の出來事であると信じて居ります、而して阿闍世の大苦悶中に、六臣がかはるゝ各自所屬の宗義を説いて、阿闍世を慰めんと試みたるが、王はこれらの教義によりて更に安心すること無く、最後に佛陀の大慈悲を頂いて喜んだとき、初めて大安心に住することを得た、この六人は其當時の九十餘種の外道の代表であつて、それら外道の教は人をして安心に至らしむるの道にあらず、眞に大安心を與ふるは、獨り佛教であると、いふことはこの事實によりて明白にせられたのである、信卷に善導大師の

九十五種みな世を汚がす 唯佛の一道のみ獨り清閑なり

の文を引いてあるはこの意味であらう、所謂外道と我佛教の區別は一方は理屈をいふて居る一方は涅槃を説くにあり、單は如何かと云ふに阿闍世に告げられた空中の聲に「佛を除いて能く救ふものなし」といふたがそれである、これは換言すれば佛陀涅槃の眞味は彌陀の本願である、彌陀の本願に非ずんば、能く救ふこと能はずといふことである、その空中の告命を聞いて阿闍世は悶絶したとある、これも私が苦しんだその當時のことを回想していかにも同感に堪へられぬ點である、次に涅槃經に説くところを見るに、佛弟子が佛に請ふて何卒入涅槃を暫し思ひ止まりて頂きたいと申したを、聞き入れ給はなかつた、而して佛が「我れ阿闍世の爲に無量却涅槃に入らず」と仰せられた、この時の阿闍世とは他のことではない、即ち私の如き惡人のことである、經には「普く一切五逆を作るものを阿闍世と名く」ともある、然らば佛は私の爲に涅槃に入り給はぬのである、次に又經文に「佛の密語不可思議なり」とある、これが即ち佛智不思議の誓願をいふたのである、親鸞聖人は非常にこゝに力を入れて居らるゝ、その時佛は月愛三昧に入りて、王の身を照らし給ふに、その光り清涼にして、爲に惡瘡悉く愈へたとある、この月愛三昧の光りは、彌陀攝取の光りである、佛陀成道の時に放ち給ふ光は彌陀の光である、二代五十年の間に説き給ひし慈悲即ち彌陀の慈悲である、

釋尊の御恵が即一佛名號六字の恵である、その大光明の懷ろに惡瘡の悉く愈へたといふのはか光明の悲母である、月愛三昧の光りが漸々五身を照らして病苦を去らしめたるは王を助けんが爲に王をして先づ佛に向ふの心を起さしめんとし給ふ方便である、こゝに於て所謂宿善の御催しをよくく味ふべきである、王はかくまでに佛陀慈愛の恵を注がれつゝも、猶疑懼して自ら決すること能はずして、これ何の故ぞと耆婆に問ひしかば、耆婆は、佛は廣大の慈悲にてましますば、佛に反さ佛に逆ふて苦しんで居るものを、捨つること能はずして、助けんが爲に下し給へる佛の恵であると答へた、之を聞いて王は直に心を決して佛所に詣つた、乃ていよく佛が阿闍世に遇ふとき何と仰せられしか、こゝが實に有り難い、佛曰く汝の父頻婆娑羅王は常に諸佛の上に諸の善根を植へたて王位にものぼることが出来たのでこそあれ、諸佛が若しもその供養を受け給はずば、國王ともならなかつてあらう、若し王とならなかつたら汝も亦國と位との爲に彼れに害を加へなかつたであらう、若し汝が父を殺して當に罪があるべきならば、我等一切諸佛も同じく罪を受けねばならぬ筈である、若し諸佛世學が罪を得給ふことがなくば、汝獨り云何てか罪を

伊蘭の樹を生ずる、伊蘭よりして栴檀の靈樹を生ずる如きことは無い、然るに今圖らざりき伊蘭子より栴檀樹と生ずる奇異の事實に接した、それは何かと云へば伊蘭子と云ふは私自身である、栴檀樹といふは我の心に生したる大信心である、この信心は根なきに生したるものである實に無根の信心である、不思議と驚歎し未曾有と喜ばざるを得ざる次第である、我れ若し如來世尊に遇ひ奉らざりしならば無量劫の間大地獄にありて無量の苦を受くべかりしを今世尊に遇ひ奉りて諸の煩惱を破壊していたゞいたゞこれ全く佛の御恵である、この不可思議の大功德は一切衆生の諸の惡心を破壊する大功德である、此大威徳を一切衆生に傳へんか爲には無量劫地獄の苦惱に身を沈めても厭ふべきでないと非常に喜び勇んで釋尊に申上げた、是より摩訶陀國の人民が皆心を傾けて信仰に入つた、佛陀の傳記の上で見ると阿闍世王は佛の滅後に於て五天竺を統一して何よりも先きに此佛教を宣傳した、王は口頭計りてなしに實際に御恩報酬をせられたのである

阿闍世王が心に佛の恵を喜ぶこと深くして述べても盡すこと能はず、重に偈頌を以て佛徳を讃嘆した、其偈頌中に、
如來は一切の爲に 常に慈父母になり給へり

得んやと非常に力強う慰めて下された、此處は理屈で彼是といふては其意味を得ることが出来ぬ、佛陀の御意のいかにも切にして急なるところを味へば何とも云へぬ有り難い味である、之を約言すれば佛陀の慈愛で、どんな人間も捨て給はぬ、佛を供養するものも捨てぬ、佛に逆ひ佛を謗るものも助けるといふのであつて、力強う佛陀涅槃の眞味を言明したのである、佛は凡ての人と共に苦しみ、衆生の樂を共に樂しむ、大慈悲の人である、思ふて見るべし、我等と苦樂運命を同じうせんと誓ひ給へる、若不生者不取正覺の御言、何程いふても盡きぬ廣大不可思議の至ではあるまいか、此の如き恵みが最後にはあらはれて下さるが月愛三昧である、月愛三昧とは月が東嶺の上に出つれば、一切の優婆塞羅華が、開敷鮮明なるが如く、月愛三昧の光は、衆生の信心の花をば開發せしむる御力である、衆生の信心の華の開けるのは全く佛陀惠の光の御力である、阿闍世は斯の如き意外千萬の事と逢ふて非常に喜ばれた、所謂能發一念喜愛心の上からその喜びと述べた言辭がこゝである、自分は初から如來を恭敬することも知らず、佛に背いてあつたものが意外にも今斯の如き喜びを得るに至つた廣く世間を見るに彼の激しき毒臭ある伊蘭の種子よりは必ず

當に知るべし諸の衆生は

皆是如來の御子なり

世尊大慈悲は

衆の爲に苦行を修し玉ふ

人の鬼魅に著はされて

狂亂して所爲多きが如し

といふのである、佛教の結局、佛教の妙味眞髓は此の如く直接である、我々一人しか如來の御子である此愛子に對する慈父母たる如來は如何にあるかは此阿闍世の信仰に入つた事實で明了である、阿闍世は大狂亂者である、大騒動を爲したものである、か程の惡逆のものにまていよく恵を注いで下さるか佛陀世尊である、否阿闍世王自身か罪惡救済を示した大聖である、日本佛教史の上で云へば太子に反對せる守屋も、法然上人親鸞聖人を流罪に陥れたる南都北嶺の人々も皆これ同じく佛廣大の恵を此人生の上に顯はさんか爲の方便示現である、其他種々一家の上の動搖も國家社會の吉事凶事、何事も皆如來廣大の御手廻はして我々を信仰に導玉ふ道筋である、信卷序に「夫れ信樂を獲得することは如來選擇の願心より發起す眞心を開闢する事は大聖矜哀の善巧より顯彰せり」といふか全く今の提婆阿闍世の逆害の事件を指したものであらう、かく廣大の出來事によりて廣大の恵を頂くこと印度の昔日のみならず今日の我々が廣大の佛力を知りて日夜に佛の恵を喜

ふは皆佛陀廣大不可思議の御力の致すところである、日夜無明煩惱に惑溺迷亂せる我等が圖らず心中に大安心大平和を與へられ、智慧善惡貴賤老少の別なく、齊しく斯の如き大利益を得させて頂くとは如何にも廣大なることである親鸞聖人此の事實に就て非常の感激を以て宣言し玉はく

「是を以て今大聖の眞説に據るに難化の三機難治の三病は大悲の弘誓を憑み利他の信海に歸すれば、これを矜哀しこれを憐憫して療し給へり、喩へば醍醐の妙藥の一切の病と療するが如し、濁世の庶類穢惡の群生、金剛不壞の眞心を求念すべし本願醍醐の妙藥を執持すべきなり應に知るべし」

此の如く現在こゝにありて涅槃の妙味を味はせて頂くのみならず、猶進んで涅槃の至極まで行かしていただくのが、極樂往生である。



新疊すがしきやどに春まというぐひすの音の鳴き合せずも

幼兒が庭の莖菜を引きむしりたゝみの上に花こき散らす

新疊かをる數寄屋に注連かざり日はたかくしてひとの氣もなし

あかゞりに飯をくはしめ口塞く汝がこせくりは黙に劣れり

暉を水に濡して風しみるいたきつとめを知らずと思ふな

あかゞりの汝が手を見れば汝を思ふ心にいたし汝を思ふわれ

いとほしみ戀ひてなげゝばあかゞりの手になほし汝にこひまさる

嘆

咏

冬三題

左 千 夫

冬之林

老人が腰かゝみつゝ霜おかしはやしに入るは寺詣るらし

朝霜の清けき畑の桑の間ゆ杉のはやしに小路とほれり

朝霜に風も動かねば日は出れ林の木魂いまだねむれり

あめ地は霜氣に明けて杉はやしおほにくらさを煙つゝめり

疊

暮晚く替したゝみの新疊草のかをりしはるになへり

行 誠 上 人

春といひ秋とくらして花紅葉みしはゆふべの夢にぞありける。

阿彌陀佛と聲にはたてよ山彦もよべば答ふるならひある世に。

ゆかばやと思へばやがて足柄の關のとざしもさはらざりけり。

あれまさる心の駒はいくたびも鞭うちこそすゝむとをしれ。

此世のみよとな思ひそ後の世も其ののち世もおなじ世なるぞ。

歸路

増田 甚

朝戸出に今日を憂へし、
たゞならぬ空いつしかに
さりげなく晴れわたりにき。

暖き日影浴ぶれば、
いたづらに暮さむ心
あのづから持たるべしやは。

冬の日に實に珍しき、
長閑なる野にいそしめば、
力業苦しともなし。

うらけき空に漂ふ
白雲の輕きを見ては、
なか／＼に心もそらに。

今日の業終へて歸ると
吾が起てば、吾家のあたり
烟たゞ空へとのぼる。

日の人れば、今か歸ると
吾待ちて、母は自ら
夕餉をし營むらしも。

春近き夕べ静けき
歸るさに、亦斯くあらむ
吾が臨終かけて思ほゆ。

あらんことを、切望に堪えざるものなり。次に到り給ひしを、

韓國の津田常没氏とす。氏は從來韓國珍島に在りて、家業の經營に従事せられたりしが、身體風土に適せず、今回遂に意を決して本國に歸住せられ、其途に吾人を訪問せられたるなり。氏が告白文は昨年の本誌第二號に掲載したれば、讀者は尙ほ記憶し給ふべし。氏は爾來法味を愛樂せらるゝ事一層にふかく、昨年來は禁烟を斷行し、今回又禁酒の實行を試みられたりあり。氏が從來を知る親族朋友は、何れも氏が態度の一變せるに驚嘆せざるはなしといふ。氏は吾人に其胸中を告げて曰はく、「吾が入信以來周囲の状況一變して、何處に行くも難有き事のみなるは、却て心迷ふ斗り也云々」と。吾人は氏が此の歡喜の狀を見て、今更に信力の偉大なるを感ぜずんばならず。而して津田氏と同じくして來り給ひしは

美濃の美濃島與之助氏にして、氏は唯信心歡喜の餘近角に遇はんが爲めに、同國郡上郡より態々上京せられたるなり。氏は久しき以前より同地の小學校に教鞭を取られ、生母の溫き信仰に養はれて、遂に一味の大慈に入り給ひしといふ。其信仰の如何に美はしきかは、吾人乞うて本誌に氏の告白を掲載したれば、茲には言はず、吾人は一見氏と接するや、直ちに氏が敬虔なる感謝の情に打たれて、殆んど語を挟むの餘地なき程なり。學舎に滞在せらるゝ事三日、其間も近角と談話の暇には常に從來の本誌を繙き、専心法味を愛樂し給ひ其素朴なる容姿、謙虛なる行動、實に眞宗信徒の曲型として、吾人は今猶ほ追慕の情に堪えざるものあり。猶ほ以上の三氏は近角の歸京以前に來京せられ、數日間貴重なる時日を費し

時報

一月中の求道會

年と共に慈光の光被、世に彌々普ねかるべしとは、吾人が年末年始に於ける所願なりしが、果せる哉、吾人は新年勿々意外なる同胞の、意外なる邊より頻々として來訪せらるゝに遇ひ、益々内心の歡喜に堪えざると共に、信仰の機運日に純熟しつゝあるを感ぜずんばあらざるなり。殊に今回來京の方々は、何れも信後歡喜に溢れ給へる方々にて、吾人は此等同胞の熱烈なる告白を拜聴し、敬虔なる態度を目撃する毎に、唯々同感の涙に咽びて、共に大悲の洪恩を謝するの他を知らざりき。吾人は今左に其人々を紹介せんとす。

先づ第一に學舎を雷づれ給ひたるを、信州の寺田五三子女史なりとす。女史は同國松本の人にて、昨春も出京して親しく求道會に列せられたる事あり。爾來深く同地に於ける佛教の荒廢を慨して、同地女學校に教鞭を取らるゝ傍、自から私財を抛ちて一私塾を經營し、専ら教育上より信仰の鼓吹に努力せられつゝありしが、今回更に女子求道會を設立して、正面より信仰の普及を試むべく其計畫を齎して來京せられたるなり。在京約十日間、幸に同地出身の人々は此舉を賛成し、格別の同情を以て女史の爲めに奔走せられたりといへば、必ずや會務の進行見るべきものありしならむ。吾人は此一婦人が健氣なる信仰の事業に接して、大悲照護の下彌々健全なる發達

て、其歸京を待ち給はりしは、吾人のふかく謝する處なり。

次に來舎せられたるは、海軍少尉候補生中村吾二君なり。同君は今回江田島兵學校を出て、遠洋航海に赴かんとするに臨み、忽然として熱烈なる信仰に入り、歡びのあまり、來つて其心中を披露せられたるにて、其炎々燃ゆるか如き信仰には、何人も同化せられざるは無く、其縷々として心中の至誠を吐露せらるゝ時は、一座爲めに暗涙を拭ひし事一再に止まらず。尙ほ同君は航海前にて、非常の多忙にも係はらず、世の墮落せるもの、悲める者の爲めに、滿腔の同情を以て大悲の救済を傳えられ、吾が求道學舎第二求道會に於ても其赤心を披露せられたり。吾人は同君の在京の短時日なりしにも係はらず、同君の爲め慈光に誘導せられ給ひたる人の數なからざる可きを信するものなり。尙ほ同君も告白文を本誌に掲載せられたれば、求道の士の必讀を請ふ。又中村君の同窓なる海軍少尉候補生長谷部連三君も同時に、吾人を訪問し給ひたり。同君は嘗て親友の一人が吾が學舎に在りたる緣故を以て、屢々求道講話に列席し給ひたりしが、其後江田島に在學中、遂に時節到來して信樂開發の至幸に接し給ひたるにて、君の謹嚴森肅の態度は、中村君の歡喜湧躍の狀と相應じ、誠に感涙に堪えざるものありき。吾人は此兩君が飽迄相提携せられて、海軍部内に信仰の光輝を發揚し給ふ日の至らん事を、反す／＼も切望するものなり。猶ほ同君の告白も何れは本誌上に掲載せらるべき筈にて、此兩君は既に本年の二十五日を以て軍艦松島に乗り込み横須賀を解纜して、遠洋航海に出發せられたり。吾人は幸に兩君の健康を祈る。其他に兩君と前

後して學舎を訪問せられたる

熊本の篤信者にて某婦人あり。婦人は十數年來具さに人生の苦闘を嘗め、境遇の薄命を悲しまれつゝありしが、一昨年に於ける近角の熊本傳道が因縁となり、終に攝取光中の人となり給ひたるなりといふ。今回上京中も講話に列するを以て無上の樂みとせられ、毎日曜毎に必ず出席して、法味を愛樂せられつゝあり。

扱て已上は本月中にありて、地方より上京して求道會に出席せられたる人々なるが、舊臘來歸郷中なりし近角は、月の十日を以て歸京し、爾來求道學舎第二求道會共一回の休みなく開會して、常に來聽諸兄弟と共に大悲の矜哀を讃仰しつゝあり。殊に本月二十七日の講話には參聽者非常に夥しく、講話題は「信力自然」にして、説く者も聽く者も、佛願力の偉大なるに感動せざるは無かりき。猶ほ當日は最終の日曜にて、例によつて信仰談話會に移りては一入に有り難く、中にも越中富山生れの一婦人の告白談には、流石有持の男子も、唯々仰敷に堪えざらしめられき。此婦人は若年より人生の無常を感じ、二十年來ひたすら道を求めて苦しめられたりといふ。あまりに愚痴なるが耻かしけれど耻の搔き納に話さんとして告白せられたる一節に曰はく

吾が最初の動機は本願寺法主巡教ありて佛願の生起本末を聞て疑心あることなしとの親教なきにいかにして聞き分けうべきかと二十年來苦心せしが一日或僧の説教に我高座の上では喜ぶか、下れば煩惱が起るとの言なきハット思ひ彼御僧てさと思ひし時御慈悲に氣がつけり云々

求道會館設立喜捨金受

領報告 (第三十三回)

| | | |
|----------|-----|---------|
| 一金五圓也 | 東京 | 上杉 文秀殿 |
| 一金壹圓也 | 東京 | 宇佐美英太郎殿 |
| 一金壹圓也 | 石見 | 木村 春雷殿 |
| 一金壹圓也 | 美濃 | 澁谷 數馬殿 |
| 一金壹圓也 | 和歌山 | 三輪 了聽殿 |
| 一金壹圓也 | 福岡 | 安村 曉雲殿 |
| 一金貳拾圓也 | 東京 | 金津 老母殿 |
| 一金四圓也 | 美濃 | 田中 敬信殿 |
| 一金壹圓也 | 東京 | 美濃島與之助殿 |
| 一金壹圓也 | 江州 | 佐藤兵太郎殿 |
| 一金壹圓五拾錢也 | 東京 | 松井 勇吉殿 |
| 一金貳圓也 | 府下 | 松島 幹夫殿 |
| 一金參圓拾貳錢也 | 東京 | 羽村求道會殿 |
| | | 星野權兵衛殿 |

小計四十八圓六十二錢也
通計金貳千七百〇參圓也

右御寄附と忝うし難有奉存候
茲に謹みて奉感謝也

吾人は現代社會の風潮と文壇の趨勢とを樂觀するものに非ず

第一卷

少年の關

| | | |
|------------|-------|-------|
| 小年ノ關 | 廣瀬 青波 | 岡 傘 谷 |
| シヨバンの戀日記 | 廣瀬 青波 | |
| 最近に死せる佛國詩 | | |
| 界の巨人シユリーブ | | |
| リムードンム | | |
| ツアラトウストラの由 | | |
| 來と製作當時ニイチ | | |
| エの生活 | 増田 八風 | |
| 夜の歌(ニイチエ) | 増田 八風 | |
| 入相雜詠 | 安江 不空 | |
| 劍路行 | 平福 百穂 | |
| 四騎旅雜歌 | 依田 秋圃 | |
| 千鳥 | 胡桃澤勘内 | |
| 玉 | 柿の村人 | |
| 歡迎哀別(ゲーテ) | 三井 甲之 | |
| 少女(ヘッベル) | 増田 八風 | |
| 波 | 増田 八風 | |
| 冬日母の墓に詣づ | 鈴木 紫峽 | |
| 「アカネ」發行を祝す | 鍋房 主人 | |
| 「平凡」に就て | 伊藤左千夫 | |
| 戀の籬 | 伊藤左千夫 | |

| | | |
|-----------------|-------------|-------|
| 晩秋雜詠 | 人々に寄す | 長塚 節 |
| 蕙蘭の玉(長詩) | 歡樂(長詩) | 長塚 節 |
| 鏡と光(長詩) | 鏡と心(長詩) | 岡 龍 峯 |
| 夕の思(長詩) | 北行く水(長詩) | 岡 龍 峯 |
| 俳句界の新傾向 | 冬季雜詠 | 光 峯 |
| 冬十句 | 移轉雜詠 | 大須賀乙字 |
| 網代五句 | 冬の湖の月(連作短歌) | 松 井 泉 |
| 野口米次郎氏の泡鳴論 | 最近の小説及脚本 | 三井 甲之 |
| 新年雜誌の長詩短歌常音甲之八風 | 結網(寫生文) | 伊藤左千夫 |
| 應募短歌(天象) | 應募短歌(春の植物) | 長塚 節 |
| 應募短歌(春の植物) | 投稿及將來の方針に就て | 三井 甲之 |

アカネ發行所

千駄木町十五番地

大賣所 東京 堂 上田 盛春 堂 服部書店

第一號

青年文學雜誌と發行し信仰的自覺を以て活動せむとす

文學博士 南條文雄著

豫約 梵本和譯無量壽經

全一冊

菊版三百五十頁 クロス綴上製
定價一圓二十錢 小包 八錢

淨土教の根元は佛説無量壽經に於て詳説せられたり。彌陀の本願名號の意義を知らんと欲する者は此經を播かざるべからず。此經支那に於て翻譯せられたること前後十二回中現存するもの漢吳魏唐宋の五譯ありて世に流布す。されど未だかつて梵本より直接に我國語に斯經を翻譯したるものあらず。南條博士が梵語に精通し給へることは敢て喋々を要せず。本書は博士が心血を注ぎて梵本より翻出せられたるもの也。本書成りて十九年其間に於て同好者に筆寫せられて珍重せられつゝありしが、かゝる珍重の書は廣く世に行はれざるを遺憾とし今回博士の丁寧なる校訂を乞ひ出版することゝなれり。願くは彌陀を信する同行の間に本書の弘まらんことを、因に本書は梵語和譯の外に現存の五譯を並出對照して讀者の便たらしめたり。又本書の附録として阿彌陀經の梵本和譯を添へたり。之れ亦珍重すべき書也。敢て江湖愛讀の士を誘ふと稱云ふ

豫約法 申込期限二月廿八日まで 製本發送は三月廿日 豫約價八拾錢也 小包料八錢

豫約申込所發行所 東京 集 鴨 一ノ三五 振替三二二二 無我山房

文學士 三井甲之著

集消なば消ぬかに

定價四拾錢 郵税二錢

目次

- 消なば消ぬかに
- 氷る冬の夜
- 生れしこのかた
- 寫眞
- 初夏
- 女のふみ
- 秘めたる心
- 新室
- 身を地に投ぐれば
- 名残の思
- 死
- 魔力
- 小さきねたみ
- 時はいつ
- 驚き
- 卯花
- 夢
- にくみ難きは
- 天のめぐみ
- 秋草
- 寂寥
- その横顔
- かへりみ
- 若き農夫
- 低き聲
- 人の運命
- 藻伏東鮎
- 鳥小屋
- 小さき解脫
- 夕立
- 旅僧
- 地の力

吾人の詩は意志を出發點とし又歸着點とする強烈にして深刻なる心中の動搖波瀾を情趣に直接にして彈力ある言語により緊密に表現せんとす。空漠なる感情の繪畫的記載と平凡なる理義の教訓的説明をなさむは吾人の理想にあらず。又冗漫なる技巧を弄して消閑の具たらしめむとするものに非ずして、直に實世間生活上の憂患を解脫するの力たらしめむことを期す。眞面目に人生を味はむとする青年諸君の同情を得むことは著者の至願也。

發行所

東京神田區表神保町 振替口座四一〇五 電話本局一六一八

近角常觀著(品切中)

信仰之餘瀝

定價拾五錢 郵税貳錢

近角常觀著(再版準備中)

人生と信仰

定價貳拾錢 郵税壹錢

近角常觀校訂(再版出來)

冠 歎 異 鈔

一冊郵税共七錢 (定價五錢郵税二錢) 但三冊までは 郵税貳錢

發行所 東京市本郷區 森川町一帯地

求道發行所

近角常觀著(第四版出來)

懺悔錄

定價貳拾錢 郵税貳錢

發行所 東京市本郷區春本町 二丁目二十一番地

森江分店

賣捌所

求道發行所

大賣捌所

東京市神田區表神保町 東京 堂

發行所

求道發行所

發行兼編輯人 近角常觀 印刷人 白土幸力

東京市本郷區森川町一番地

規定

| | | | | |
|-----|-----|------|-------|------|
| 一部 | 一ヶ月 | 六ヶ月 | 一年 | 郵税一冊 |
| 金拾錢 | 金拾錢 | 金六拾錢 | 金壹圓拾錢 | に付五厘 |

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十一年一月廿七日印刷
明治四十一年二月一日發行

前號要目

求道

◎眞諦の信仰を以て世諦を經營せよ

《聖徳太子と親鸞聖人》

◎親鸞聖人の偉大なる所以

《人格論》

感謝

◎年頭感恩◎新春の頌讃◎無常の覺悟◎

報謝の經營

講話

◎眞宗の教證

近角常觀

聖傳

◎デヤータカ釋尊傳

第四 富者チユルラカの話

告白

◎信界美談

慶歎

管瀬芳英

◎眞宗慶嘆

八 一念横超

近角常觀

歎咏

◎大悲本願《長詩》

◎親ごころ《短歌》

時報

甲之
増田 甚

◎昨年の求道會◎其後の求道學會◎求道學會の報恩講